
メイドロボ

猫満月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メイドロボ

【Nコード】

N7091E

【作者名】

猫満月

【あらすじ】

主人公、青空雲八が出会ったのは、“人間恐怖症”の女性型ロボット。最初は雲八のことも敵視していたロボットだったが、優しい雲八に、少しずつ心を開くようになり……………。

ブローグ

苦しい。

……助けて、誰か助けて。

もうこんな苦しいのは嫌。

耐えられない。

誰か……誰か私を壊して。

お願い……、殺して。

第1話 店

「……ここか」

とある繁華街を歩き続ける事数十分。カラフルな壁に彩られた店に、男は辿り着いた。何度か地図を見て間違いでない事を確認し、その男は店の中へ足を踏み入れる。

その瞬間 ……男を、沢山の人影が取り囲んだ。

「いらつしゃいませ！」

それは何十人ものメイドたちだった。男は一瞬怯んだが、すぐに唇を引き結んで背筋を伸ばす。

「ご来店は初めてですか？」

二次元の世界から飛び出してきたアニメキャラのような甘く可愛い声で、目の前のメイドがそう問う。男は何度か首を縦に振り、やっこの思いで返答した。

「……は、はい」

「それでは、こちらのお席へどうぞ」

これまた可愛い、パステルカラーの机と椅子を指してにっこりと微笑むメイド。男は、メイドたちに軽く頭を下げてからその席に腰掛けた。

「只今、当店の責任者を呼び出しますので少々お待ちください」

「はい」

「コーヒーやジュースはおかわり自由となっておりますので、お気軽にお申し付けください」

「はい」

メイドたちが自分の前から姿を消してしまうと、男はやつと肩の力を抜いて、大きく息を吐いた。

こんな可愛い店に入ったのは彼にとって初めての体験だった。居心地が悪い。こんなところで知り合いの女性に会ったりしたら死にたくなるだろう。

男は溜息を吐きながら、出されたコーヒーを口に運んだ。目線だけを動かして、賑やかな店内を観察する。

はじめは男性客が多いように感じたが、良く見れば女性客も多かった。小学生くらいの子供も居れば、老人もちらほら。

……男の目の前で、たった今、1人の中年女性が“買い物”をしていったようだ。

「カードで、一括払いをお願いします」

甲高い声でメイドにそう告げ、中年女性は足早に店を出て行った。男はその女性の後姿をぼーっと見つめたまま、心の中で呟いた。

（カードで一括払いか。……一度は言ってみたい台詞だな）

それから男は、先程から忙しそうに働いているメイドたちを目で追った。メガネを掛けたメイド、ポニーテールのメイド、ツインテールのメイド……。メイドの種類は様々だ。全てのメイドが愛らしい笑顔を浮かべて接客をしている。

「いらつしやいませ！」

「今回のご希望は何に致しますか？」

「修理ですね。了解しました！ お値段の方は後ほど……………」

こんなに間近でメイドたちを見ているのに、未だに信じられない。
彼女たちが皆、ロボットだなんて……。

第2話 ロボット販売店

この店は、最近巷で噂になっている『ロボット販売店』だ。ここに
取り揃えられているロボットのバリエーションは幅広く、家事、育
児などを受け持つメイドロボや大工などの力仕事を軽々こなしてし
まう男性型ロボなど、目的に合わせたロボットを購入する事が出来
る。

そしてこの男も、ロボットを購入しようとこの店へ訪れた人物のひ
とりだった。

暫く椅子に座ったまま待っていると、人の良さそうな笑みを浮かべ
た初老の男性が現れた。

「いらつしやいませ。この店の責任者の大野と申します」
おおの

「あ、……ええと、青空雲八あおぞらくもはちです。宜しく願います」

片手を差し出し軽く握手を交わすと、大野はすぐさま雲八の隣に腰
掛けた。

「ご来店は今回が初めてということですね」

「は、はい。そうなんです」

「ご希望などはおありですか？」

「えーと……俺、この街の大学に行く為に上京してきたんですけど、
恥ずかしい事に家事が全く出来ないの、身の回りの世話をしてく
れるアンドロイドを購入しようと思うのですが」

「家事のできるアンドロイドは女性型のみしかご用意していないの
ですが、それでも宜しいですか？」

「はい、構いません」

「かしこまりました。それでしたら、当店のオススメはこの3体にな
ります」

差し出された写真には、3人の女性……もとい、3体のメイドロボが映っていた。1枚目、なかなか人懐こそうな笑みを浮かべたロボ。……設定年齢は21歳。2枚目、元気そうに笑っているロボ。……設定年齢は16歳。3枚目、少しはにかんだ感じの笑みを浮かべているロボ。……設定年齢は22歳。

親に買えと奨められたただけなので、正直どれでも良かった。雲八は何度か頭を掻き、3枚目の写真を手に取った。

「それじゃあ、この……」

言いかけたその時。大野が持っている分厚いファイルから、1枚の写真がひらりと落ちた。

「あ、何か落ちましたよ」

雲八はそれを拾い上げ大野に手渡そうとしたが、その写真に写っているものを見て、動きを止めた。

そこに写っていたのは、1体のメイドロボだった。他のロボたちは皆口元に笑みを浮かべているのに、このロボだけは無表情だ。右目が青色、左目が赤色の、神秘的な瞳。しかしその瞳は虚ろで、どこか遠い目をしている。

「あの、これは……？」

大野はその写真を見て、一瞬悲しそうな顔をした。しかし、すぐに優しい笑みを浮かべて質問の答えを返してくれた。

「これは処分予定の女性型アンドロイドです」

「処分？ …… 不良品なんですか？」

「いえ、そうではないのですが、少々問題がございます。もし興味がおありなでしたら、見学なさいますか？」

雲八は暫く写真を見つめた後、首を縦に振った。何故かは分からないが、このロボに会ってみたいという強い気持ちが湧いたのだ。

「それでは、こちらへどうぞ」

第3話 倉庫

連れてこられたのは、店の倉庫らしき所だった。倉庫は湿っぽくて真っ暗で、とてもあの可愛らしい店の中に存在する空間だとは思えないほど、暗く寂しい場所だった。そこには大きなガラスケースが沢山並んでおり、その中に瞳を閉じた状態のロボットたちが1体ずつ入っている。

「原則として、3回以上返品されたロボは処分する決まりとなっているのです。お客様に不快感を与えるだけでなく、新しいロボを製造する時に邪魔となり兼ねません」

大野はそう説明しながら更に地下へと続く階段を下りていく。雲八は周りに並ぶロボたちを気味悪そうに見つめながら、その後へ着いていった。

……地下3階に、そのロボはあった。

大野曰くこの店の処分予定のロボは、引き取り先がなければ返品後4日目の早朝に処分されるそうだった。そして今雲八の目の前にいるロボは、今日で処分予定の日にちが3日過ぎたらしい。つまり、明日の早朝には処分されるということらしい。

彼女の皮膚は恐ろしい程に白く、透き通っていた。その細い首には白い紙が巻きつけられており、そこには『004』という番号が記入されている。どうやら、これはロボットの個体番号のようなものらしかった。そのロボには、幼い子が良くやるような大きなお団子が2つ、まるで鼠の耳のようについていた。その髪型はとても印象的で、美しく整ったロボットの顔立ちには酷く不釣り合いなもののようだった。しかし、なんだかそのギャップがまた愛らしくも見えて、一度見ただけで心を奪われてしまった。

第4話 人間不信

もしもこれが本物の人間だとして、普通に街を歩いていたら……きつと擦れ違った人々は振り返り、あまりの美しさに言葉を失うだろう。それほどまでに彼女が放つ神秘的なオーラは強烈だった。雲八もまたその美しさに魅了され暫く言葉を失っていたが、すぐに我に返って大野に尋ねた。

「あの……ところで、どうしてこれ、返品されてしまったんですか？　美しいから買い手はいくらでもいそうですが。先程も聞きましたが、不良品というわけでは無いんですよね？」

すると大野は小さく頷き、俯いたまま弱々しい声を出した。

「……はい。実は……このロボは、少々人間不信なところがあります」

それを聞いた雲八は、驚きを隠せず大声をあげた。

「え！　に、人間不信って……ロボットが、ですか？」

「はい」

大野は深く頷いて、ロボの入ったガラスケースにそつと触れた。

「最初はこのロボも他のロボと何ら変わらない、笑顔の可愛い、とても元気のいいロボだったんです。しかし、どうやら最初の雇い主様に様々な暴力を受けたらしく……。それから、人間が恐ろしいと泣くようになりました」

「え……」

雲八は、慌てて顔をあげ、目の前のロボを凝視した。……一体このロボは、その雇い主とやらに何をされたのだろう。

「大野さん。その話、もう少し聞かせて頂けませんか？」

「はい……構いません。ただ、私にすら何をされていたかまでは詳しく話しませんので、私が知っている事だけで宜しければ、全てお話します」

雲八は004号の入ったガラスケースに両手をつけて、大野の話に耳を傾けた。

第5話 人間恐怖症

「このロボ…… 004号は、店に並んだその日のうちに買い手が決まりました。お買い上げになられた雇い主様は、ちょうど青空様と同じくらいの年齢の男性でした」

……そう、その日、004号はその男性と手を繋いで店を後にした。満面の笑みを浮かべて、大野に大きく手を振りながら ……。

「それから1週間、2週間、3週間…… 1ヶ月経ちました。雇い主様から返品の連絡も無く、きつと大切にして下さっているのだろうと思っております。しかし…… その矢先でした。ゴミ収集の方々から、当店に連絡が入ったのです」

ロボットのようなものがゴミ捨て場に捨てられているのですが、これはそちらのお店のロボットではありませんか？

雲八はハッと息を呑み、大野のほうを見た。

「……もしかして、そのロボが？」

「……はい。この004号でした」

大野がゴミ捨て場に駆けつけると、004号は確かにゴミ捨て場に遺棄されていた。が、しかし……。

「004号は、機能停止しておりました」

哀しげに呟く大野。雲八は、大野の言葉を繰り返した。

「機能……停止？」

「はい。……ロボットにとっての、死でございます」

「死？ ど、どうしてそんな……！」

「ロボはとも丈夫につくってあります。ちょっとやそつとのことでは壊れません。しかし、私がゴミ捨て場に駆けつけたとき、……彼女は、無残な状態でした」

辛そうに目を伏せる大野。雲八は眉を顰め、少し声を落として尋ねた。

「……どういう意味ですか？ ……無残な状態？」

はい、と呟いた大野の瞳は、若干潤んでいるように見えた。

「……引き取りに行ったとき、004号には下半身がありませんでした」

「！ 下半身が……？」

「……調べた結果、自然に壊れたのではないらしいという結論に落ち着きました。誰かに鋭利な刃物か何かで切り落とされたのでしよう」

「そんな……」

「……当店のロボは、できるだけ人間に近くなるように製造しておりますので、心もありますし、血液も、偽物ではありますが一応通っております。そして勿論、……痛みも、感じるように作っております」

それを聞いた雲八は片手で口元を覆って顔を歪めた。痛みも感じ、心もある……。それなのに、下半身を切り落とされたりしたら……。

「……下半身は見つかりませんでした。脳内に入れてあった記憶などは全て無事でしたので、下半身をもう一度作り直して004号をこの状態まで復元しました。しかし……記憶をそのまま残してしまったのがいけなかった。004号は人間恐怖症になり、お買い上げ頂いてもすぐに返品されるようになってしまいました」

「どうして、記憶をそのまま残したりしたんですか？ 記憶を無くせば、恐ろしい記憶に苛まれる事も無かったのでは？」

「……004号は、家事などが完璧に出来るように製造してあります。記憶を消してしまうと、家事の仕方などのデータも全て失われてしまいます故、仕方なかったでございます」

雲八は改めてロボットの顔をまじまじと見つめた。この004号は空白の1ヶ月間、以前の雇い主から、きつと想像もつかないような酷い扱いを受けたのだろう。そう考えたら、004号があまりにも憐れに思えた。人間のせいでこんなことになってしまったのに、折角心を持って生まれてきたのに、人間を恨んだまま、人間に恐怖心を抱いたまま、明日にはこの世界から消えなければならないなんて……。

少しだけでもいい。彼女に、この世界に生まれて良かったと思って貰いたい。

雲八は決意した。ガラスケースに眠るロボットの横顔を見つめたまま、大野に声を掛ける。

「大野さん」

「……はい？」

「……俺、このロボットを購入します」

「はい。……えっ？」

大野はきよとした顔をしたが、すぐさま慌てた様子で雲八の顔を覗きこんだ。

「ちょ、ちょっと待って下さい。……本気ですか？」

雲八は躊躇い無く頷き、大野に向かって笑みを浮かべた。

「はい」

第6話 004号

「本当に宜しいですね？」

「はい」

「……わかりました。それでは、004号の起動準備を致しますので少々お待ちください」

大野は、慎重に004号をガラスケースから取り出した。ガラスケースの中には何か特殊な液体が入っていたらしく、004号の衣服や髪の毛は透明な液体で濡れてしまっていた。

「マニュアルなどはこの袋に入れておきます。何か困った事があればお読みください。尚、無料返品可能期間は3週間です。その期間を過ぎた場合返品の際に手数料がかかりますので、予めご了承ください」

「はい。……わかりました」

そう返しながら、雲八は決意していた。絶対に返品などはしない。もう二度と彼女に悲しい思いはさせない、と。

雲八は、無責任という言葉が一番嫌いだった。

「それでは青空様。004号の首に巻きついている紙を解いてください。それが起動合図となります。……さあ、どうぞ！」

「……は、はい！」

雲八は恐る恐る004号の首に手を伸ばした。そして、首に巻きついているその紙をそつと解いた。

紙を解いた瞬間、004号の頬に、赤みが差した。少しずつ、心臓

の鼓動のような音が響き始め、その音が大きくなるに連れて、モーター音のような音も鳴り始めた。雲八は少しうろたえながら004号の目の前に立った。……雲八の目の前で、004号の両目が開く。吸い込まれてしまいそうな青色と赤色のオッドアイ。……やはり写真で見たのと同じ、虚ろな目だった。

「おはよう、004号」

大野が笑みを浮かべてそう言うと、004号は両目を見開いた。そして、自分の両手を見つめて困惑したような表情を浮かべた。

「……博士……なぜ、私はまだ存在しているのですか？」

大野はその質問には答えず、雲八の方に視線を振った。

「……新しい雇い主様がいらっしゃったんだ。ほら、004号……挨拶しなさい」

004号は唇を震わせ、首を横に振りながら後ずさった。見る見るうちに、彼女の顔から血の気が引いた。

「あ、ああ……っ博士……また、私を裏切ったのですね……？何度も……私は貴方に伝えたはずです。……壊してください、と。それなのに……なぜ、まだ私をこんな世界に生かしているのですか！ 私はもうこんな世界嫌なんです……！ 人間の顔なんて、もう見たくない！」

声を荒げて大野に掴みかかる004号を見て、呆然とする雲八。大野は慌てて004号の顔を雲八に向けさせた。

「004号！　この方が新しい雇い主様だ。大切にさせて頂きなさい」
雲八を捉えた004号の瞳が、更に大きく見開かれた。彼女の脳内に、あの悪夢の日々がフラッシュバックする。

『……この方が君の雇い主様になってくださるんだよ』

『初めまして、004号。仲良くしような！』

『は、はい！　わ、わたくし……頑張ってお仕事します！』

アンナニ、優シソウナ方ダッタノニ……彼ハワタクシヲ痛メツケタ。……殺シタ。ドウシテデスカ？　ワタクシハ、貴方ノタメニ頑張ッタノニ……。貴方ニ一生ヲ捧ゲル決意ヲシタノニ……。

「い……ついやああああ！」

004号は発狂し、雲八を突き飛ばした。雲八は後ろにあった棚に頭をぶつけてしまい、うつと呻き声を上げた。大野が慌てて004号を取り押さえようとする。しかし004号は泣き喚きながら暴れまわった。

「こ、こら、004号！　落ち着きなさい！」

「いやああああ！　来ないで！　人間なんて大嫌い！　早く、早く殺して……！」

雲八は瞬きを繰り返しながら、暴走する004号を見つめていた。こんな風になるまで彼女を痛めつけた以前の雇い主に強い憤りを感じた。

第7話 購入

「申し訳ありませんでした、青空様！」

大野が必死に雲八に頭を下げて謝罪する。雲八は先程棚にぶつけたところを押さえながら、笑みを浮かべた。

「い、いえ。大丈夫ですよ」

大野は少し言い難そうに、雲八の顔を見て、こう囁いた。

「……しかし、あれでお分かりでしょう？ 004号は極度の人間不信で、今や開発者である私にすら心を開いてくれません。大変な思いをされる前に、他のロボにされた方が宜しいのでは……？」

雲八は一瞬だけ考えたが、激しく首を左右に振った。

「いいえ、俺は004号を買います。大切にしてみせます」

「嗚呼……青空様、貴方はなんて心の優しいお方なんでしょうか。本当にありがとうございます！ あんなロボですが、私にとっては娘のようなものです。どうか、どうか……大事にしてやってください！」

「はい、勿論です！」

2人は固く握手を交わして、笑顔を浮かべた。

「それでは……お値段の方ですが、こちらになります」

「あれ？ ……あの、他のロボより安くないですか？」

「あれは少々難がありますので、お安く致しました。……他のお客

様には、どうかご内密に」

「はは、助かります。ありがとうございます」

すぐさま雲八は持っていた鞆の中から財布を取り出した。両親が口
ボ購入の為に貯金をしておいしてくれたので、難無く支払いを済ませ
ることができた。

004号は、すぐに他の定員メイドロボに連れてこられた。しかし、004号
の両目には黒い布が捲きつけられ、口には猿轡がはめられ、白く細
い手足には、まるで監禁されているかのような拘束具が取り付け
あつた。雲八はそれを見て驚愕し、大野に小さな声でこう訊いた。

「お、大野さん。これは取ったほうがいいんじゃない？」

「ですが、外せばまた大暴れしますよ」

「……でも、」

これではあまりに可哀想だ。……それに、色々と誤解されかねない。
その証拠に、他の客たちが、雲八の方をじろじろと見ていた。

004号は、小刻みに震えている。大野がそつと肩に触れると、細
い肩がびくりと跳ねた。

「……004号、何故こんな風に君を扱わねばならないか、わかる
かい？」

大野が優しくそう尋ねると、004号は少し肩の力を抜き、頷いた。
他のメイドロボが、004号の口に嵌められた猿轡を外す。すると、
004号は僅かに口元に笑みを浮かべて口を開いた。

「……わ、私を、壊してくださるんでしょう？　ありがとうございます
ます、博士。これで私は救われます……」

少なからず死への恐怖はあるようだが、それよりも、004号は人間の住むこの世界から早く消え去りたいようだった。雲八はそんな004号の姿を見ていられなくなり、004号の瞳を覆い隠していた黒い布を取り去った。

「！」

急に明るくなった視界と、その視界に映り込んでいる雲八の姿を見た004号は、戸惑いを隠せないようだった。雲八は優しく笑みを浮かべて、004号の自由を奪っている拘束具などを全て外してやった。

「俺は今日から君の雇い主……、いや、同棲者になる青空雲八だよ。君のことを大切にするって約束する。……よろしくね」

雲八はそう言いながら右手を差し出した。しかし004号は震えながらその手を見つめるだけで、握り返そうとはしなかった。

……最初の雇い主もそうだった。優しくそんな笑みを浮かべていたから、安心して握手を交わした。それなのに……彼は、彼女を裏切ったのだ。

「やっぱりまだ、怖いかな」

雲八は少し困ったように笑って、その手を引つ込めた。004号は俯いて、涙を浮かべたまま立ち竦んでいる。

「俺の家、近くなんだ。一緒に行こう」

雲八は少し強引に、震える004号の手を握った。004号は小さく悲鳴をあげて雲八の手を払い除けようとしたが、しっかり繋がれた両手は、どんなに拒絶しても離れなかった。

「それじゃあ、大野さん。また何か会ったら来ます」

「はい。ご来店有難う御座いました」

周りにいるメイドロボたちも、雲八たちに頭を下げる。

「ご来店有難う御座いました！」

004号はまだ雲八の手をどうにかして払おうと必死になっていたが、雲八は全くそれを気にせず、夕暮れの街を歩き始めた。

第8話 会話

人間が苦手な004号の為に、雲八はバスや電車を利用するのをやめた。少し時間はかかるが、歩いて自宅のマンションへ向かうことにしたのだ。

「……もしかして、寒い？」

震え続けている004号を心配してそう声をかけてみたが、004号は唇を噛み締めたまま、そっぽを向いてしまった。寂しかったが、仕方の無い事なので我慢した。……これから少しずつ仲良くなればいい。

30分ほど歩いて、2人は6階建ての小さなマンションに辿り着いた。

「俺の家……っていうか部屋は、4階にあるんだ。さ、行こうか」

そう言いながら、雲八は004号の手を引いて階段をのぼっていく。004号は不安げに階段の上から地上を見下ろしていた。

「高いところ、苦手？」

そう訊くと、004号はまた俯いてしまった。雲八は首を傾げながら、更に階段をのぼっていった。

部屋の前に来ると、雲八は胸ポケットから小さな鍵を取り出した。それを鍵穴に差し込んで回す。……小さく鍵の開く音がした。

「あんまり広い部屋じゃないけど、我慢して」

雲八はそう言って笑うと、004号を連れて部屋の中へ入った。

「ええと、……台所はここで、風呂場はこっちで、トイレはこのドア。部屋はとりあえず3つあるから……この部屋を君の部屋にする。それで、こちらの部屋は俺の部屋ね。残りの1つはリビングみたいなもんだよ。あと、めちゃくちゃ狭いんだけどベランダがあるんだ。その引き戸から出られるから、後で確認しておいて」

雲八は004号に、部屋の間取りを簡単に説明した。

004号は初めて来る部屋の中にとても不安を感じている様子だった。何度もトイレと風呂場を行き来して、何かを確認しているようだ。その真剣な様子を不思議に思い、雲八は004号に声をかけた。

「……………どうかした？」

雲八が尋ねると、004号は、初めて雲八に対して口を開いた。

「……………あ、あの、ま……………窓を……………確認しよう」と……………
「窓？」

「は、はい……………。窓が……………ちゃんとあるかどうか、確認しよう……………
……………思った、のです」

「ああ……………換気のため？」
「そ、それも……………あり、ますが……………」

004号はそう言いながら、ある出来事を思い出していた。

以前の雇い主は、とある高級マンションの9階に1人で暮らしてい

た。

彼は、004号を購入して家に連れ帰ると、すぐに彼女を鎖などで拘束した。そしてその後、トイレの狭い空間に、そのままの状態ですら放置した。

トイレには窓が無く、例え鎖を取ったとしても逃げられないようになっていた。炎天下の中でトイレに閉じ込められた004号は酷い脱水症状に陥り、危うく機能停止になりかけた。

またある時は、窓の無い風呂場に連れて行かれて水を張った浴槽に2日間浸かりつ放しにされた事もあった。水の冷たさで体力は奪われ、それでも004号は機能停止しそうになった。

拳句の果てには、9階のベランダから地上に向かって投げ落とされた事もあった。無論、鎖で手足が不自由なままで、である。

その時は身体の一部が欠落してしまっただが、雇い主は004号を修理に出そうとはしなかった。その為004号は自分自身でその故障を直さねばならなかった。

そう　……004号が窓を探したのは、また同じように虐待されない為だった。もしトイレや風呂場に閉じ込められたとしても、窓があれば、逃げることは可能だから。

「それもあるけど……？」

おぞましい日々を脳内で繰り返し思い出していた004号は、心配そうに自分の顔を覗き込む雲八を見て、きまりが悪そうに下を向いて首を横に振った。

「話すことは出来ません。博士に禁じられていますので」

「禁じられてる？　どうして？」

「……話せば、折角契約してくださった雇い主様が、暗く重い過去

を背負っている私を負担に思っ捨ててしまう可能性が無いとも限らないからです」

「そんな事、俺は絶対にしないよ。それでもダメなの？」

「……申し訳御座いません」

雲八は少々残念そうな顔をしたが、すぐに笑顔を浮かべた。それから004号の頭を優しく撫でてやった。

「それじゃ、いつか話せるときが来たら話して。俺は絶対に君を捨てたりしないから。……約束する。ずっと大切にしてみせるから。」

「……いつまでも」

004号が自分に対して口を利いてくれた事が嬉しかったので、まるでプロポーズのような照れ臭い言葉を、雲八は発した。004号は、暫く不思議そうな顔をして雲八の顔を見つめていた。

第9話 名前

「あの、……私は最初に何をすれば宜しいでしょうか」

おずおずと尋ねてくる004号。まだ、雲八に対して少しだけ恐怖心を抱いているらしい。よほど恐ろしい目に遭ったのだろう。雲八はそんな004号を見て心を痛めた。

「今日は折角うちに来たんだし、ゆっくりすれば良いよ。また慣れてきてから少しずつ仕事を頼むようにするから」

004号は大きな瞳を見開いて雲八を見つめた。自分を気遣う優しい雰囲気戸惑ってしまったのかもしれない。雲八は、004号のその大きな瞳に戸惑っていた。ロボットだと知っていても、とてもロボットには見えない。日本の技術がここまで発達したことが、未だに信じられなかった。

こんなに間近で見つめているのに、004号の瞳は人工的に造られたものとは思えない。……それに、確かに004号は呼吸をしているのだ。人によって造られた人工的な肺とはいえ、彼女の肺はまるで人間そのもののように機能している。

「……004号」

ふとその名前を口にしてみたら、004号は首を傾げて雲八を見た。

「はい。何でしょうか」

「……004号、かぁ。なんか、いかにもロボって感じの名前だな」

「……はい。しかし、私は確かにロボットですので」

「でも、一緒に暮らすのに004号っていうのも、ちょっとな……」

雲八は暫く頭を抱えてなにやらぶつぶつと呟いていたが、突如何かを思いついたように、満面の笑みを浮かべた。

「004号。君の名前って勝手に改名しても良いの？」

「……恐らく、問題は無いと思われます。私はご主人様に購入された時点でご主人様の物ですので」

「そっか。じゃあ……君に名前をつけてあげるよ」

「名前、ですか？」

「名前がないと、色々不便だからさ。うーん……どんな名前がいいかな？」

雲八は、まるで自分の赤ん坊に名前を付ける時のように緊張しながら、004号の名を考え始めた。

……暫くして、雲八は004号の目を見つめ、こう言った。

「004号。……カエデなんてどう？」

「カエデ、ですか？」

「うん。もし将来娘ができれば、カエデって名前をつけたいって思ってたんだ。俺、カエデが大好きだから」

「……カエデとは、どんなものですか？」

「秋になると凄く綺麗に赤く色づく葉っぱだよ」

「そうなのですか。……わかりました。カエデに改名いたします」

004号はそう言ってそつと瞼を下ろした。その後、彼女のものではない機械的な女性の声が、彼女の体のどこから聞こえてきた。

『新データ、受信完了。データにインプット致します。……完了ま

で残り5秒。 4 3 2 1 ……、完了致しました』

……カエデの瞳が、静かに開いた。カエデは大きく息を吐いてから、雲八を見上げた。

「……完了致しました。これから私のことはカエデと呼び下さい」
「あ……う、うん」

突然カエデの体から聞こえた女性の声。それを聞いてようやく、カエデがロボットだという事を思い出した。それほどまでに、彼女は完成度の高いロボットだった。

第10話 恐れ

「さて、」

雲八が立ち上がると、カエデはびくりと体を震わせた。怯えたような目をして、雲八を見上げている。

「……あ、ごめんごめん。ええと、そろそろ夕飯の用意をしようかなと思つてさ」

慌ててそう言つと、カエデはそつと立ち上がり、台所に向かって歩き出した。

「あ、……カエデ？」

「……私の仕事です。雇つて頂く以上、私の仕事は私がします」

「そう？ ……それじゃあ、頼むよ」

雲八はそう言つて再びその場に腰を下ろした。

「食べたいものは御座いますか？」

「ううん、任せるよ」

「承知しました」

カエデはそのまま、のれんの奥へ消えていった。

それから数分経つて、冷蔵庫を開ける音や包丁を扱う音が聞こえてきた。懐かしい香りが漂ってくる。……どうやら、カレーか何かのようだ。

そつえば、今冷蔵庫にはカレーの材料くらいしか入っていないかつ

たな、と雲八が思うと同時に、皿の割れるような音と、カエデの悲鳴が聞こえた。

「…………カエデ！」

慌てて台所へ向かうと、カエデは床に座り込んで震えていた。その傍らに落ちているのは…………包丁、らしい。カエデは蒼ざめて、その包丁を見つめている。

「カエデ、大丈夫？」

雲八はカエデの傍へ駆け寄った。そして、カエデの指に血が滲んでいるのを見つけた。

「血が出てるじゃないか。…………切ったの？」

「あ…………あ…………」

カエデは震えるだけで、何も言わない。その瞳に涙が浮かび上がるのを見た雲八は、咄嗟にカエデに向かって大声を出した。

「カエデ！ こっちにおいで。手当てしてあげるから」

「いつ…………いや！」

カエデは首を大きく横に振り、泣き叫んだ。そして両手で頭を押さえて蹲り、首を更に激しく振った。

「いや…………！」

「カエデ、」

雲八はそっとカエデの手をとった。硝子玉を扱っているかのように、

慎重に。

「……カエデ、ごめん。大声出したりして……。後は俺がやるから、部屋で休んでいいよ」

優しくそう言つてカエデを立たせると、カエデは両目を両手で覆い隠したまま、ふらふらと台所から出て行つた。雲八は床に転がったままの包丁を拾い上げて、小さく溜息を吐いた。

「あー……、床に傷が……」

台所にはカレーの匂いが充満している。カレーはもう出来上がっているようだ。恐らく包丁を洗おうと流しに持っていくときに、誤つて落としてしまったのだろう。

第11話 追憶

カエデは、部屋に辿り着くと、膝を抱えて壁のそばに蹲った。

……カレーの匂いがする。外から聞こえる虫の音が、夜を運んでくる。暗い部屋。……あの日と、何もかも同じだった。

あの日……料理を作れと以前の雇い主に命令されて、慌てて料理に取り掛かった。その時、冷蔵庫の中にはカレーの材料くらいしか入っていなかった。仕方なく、カエデはカレーを作り始めた。

野菜を切り刻んで、水の分量を量って、……何も問題は無い筈だった。

しかしあの男は、そのカレーを一口食べた途端、激昂した。なんなんだこのカレーはと喚き散らし、カエデの首を締め上げた。そしてそれだけでは足らなかったのか、カエデを台所へと連れて行った男は、流し場に放置していた包丁を構え、カエデの手をまな板に押さえつけたのだ。

「お、おやめくださいご主人様！ 離してください！」

「いいじゃねえか。どうせ機械なんだろう？」

「た、確かに私はロボットです。ですが、い、痛みは感じるのです！」

「うるせえな。……黙れよ」

その瞬間、身を切り裂くような激痛が走った。左手の人差し指に火がついたような感覚と共に、自分の指が切り落とされた事を知った。叫び声を上げてのた打ち回るカエデ。男はカエデの指先から溢れ出る血を見つめて、乾いた笑い声を上げた。

「なんだ、結構人間らしく作ってあるんだな。血まで出てくるよう

「なつてんのか」

男は悪びれた様子も見せず、台所から去って行った。

カエデは急いで切り落とされた自分の指を拾い、自身のメイド服のエプロンで擦った。表面は防水加工がしてあるので水に触れても平気だが、内部もそうであるという自信は無かった。

痛みに顔を歪めながら溢れる涙を拭い、切れてしまった回線を修復する作業に取り掛かってみた。しかし、流石に元のように繋ぎ直すことはできず、包帯を巻きつけて生活することになった。人間と違って細胞が無い為、放っておいても自然には直らないのだ。治まることのない痛みを抱えて、カエデは泣きながら眠りについた。

第12話 挨拶

「カエデ、もう平気？」

突然頭上から誰かの声がして、カエデはハッと顔を上げた。カエデの顔を心配そうに覗き込んでいたのは、雲八だった。

「電気くらい点ければいいのに」

雲八はそう言って電気のスイッチを入れた。部屋が明るくなる。突然の眩しさに、カエデは目を細めた。恐ろしい記憶を思い出しながら、ずっと自分は膝を抱えて放心していたらしい。

「カレー、できたよ。……つっても、カエデが作ってくれたから、盛り付けたただけだよ」

雲八はそう言って照れくさそうに頭を掻き、手招きした。

「早く行かないと、冷めちゃうよ」

カエデは黙ったまま立ち上がり、頷いた。雲八は笑みを浮かべて、リビングの方へ向かう。

……カエデはそっと、自分の左手を見つめた。“あの人”に壊されて、新しく博士につけてもらった左手は、全く痛みもなく、自分の体の一部として正常に機能している。

しかし、今でも突然思い出すことがあるのだ。あの、火がついたような鋭い痛みの感覚を……。

「はい、カエデの分。量はこのくらいで良かった？」

「……はい。すみません。ありがとうございます」

「これ、スプーン。あと、この箸はカエデ用だよ」

カエデは、雲八から、まるで桜の花びらのように甘く美しい桃色をした箸を手渡された。もう片方の雲八の手には、透き通るように青い色をした箸が握られている。

「じゃ、食べようか。俺、カレー好きなんだよねー」

雲八は満面の笑みを浮かべて両手を合わせた。

「いただきます」

小さな子供のようになり、大きな声で食事の挨拶をする雲八。そんな彼の横顔を、カエデは不思議そうに眺めた。カエデの視線に気がついたのか、雲八は首を傾げて彼女の顔を見た。

「ん？」

「……いえ、なんでもありません」

「あ。人として、挨拶はきちんとしないといけないからね。俺の同居人になったからには、挨拶はきちんと！　これ、約束だから」

「……りよ、了解しました」

「ご飯食べる時も勿論挨拶しなくちゃだめだよ」

「は、はい……」

カエデは少し戸惑いながら、自身の手をあわせ、小さな声で呟いた。

「……いただき、ます」

雲八はそれで満足したのか、笑顔を浮かべて頷き、

「じゃあ、食べようか!」

と明るく言って、カレーを口に運んだ。

第13話 優しい言葉

食事の後、カエデは食器を洗っていた。雲八が、「俺が洗うよ」と言ったが、カエデはそれを断った。「いいえ、これは私の仕事ですから」……と。

冷たい水で、カエデは食器を洗い流す。

……あの男に雇われていた1ヶ月、良い思い出などひとつもない。思い出すのも嫌になる、おぞましい毎日……。

本当は思い出したくない。覚えてなんていたくない。だけど、どうしても思い出してしまう。

思い出したくない。思い出したくない。

常に命を削られていた、恐怖の日々。今考えると、あの男は最初から自分を痛めつけるためにロボットを購入したのだろう。

ロボットであれば、例え“殺害”しても警察には捕まらない。ロボットは、例えば心があっても、本物の人間から見れば“物”でしかないのだ。

「！」

そんな事を考えていたら、何かが自分の両手から滑り落ちた。その瞬間、鋭い音が台所中に響き渡った。……食器が割れたのだ。

カエデはその音を聞き、また嫌な事を思い出してしまった。両目に涙を浮かべて、その場に蹲る。悲鳴をあげてはいけない。近所迷惑になる、と何度もあの男に怒鳴られた。殴られて、床に引き倒されて、蹴られて、……。最終的には、機能停止にまで追い込まれた。悲鳴をあげてはいけない。

「……カエデ、どうしたの？」

背後で雲八の声がした。カエデは、慌てて振り返り、立ち上がった。

「……も、申し訳ございません。ご主人様……」

「ああ、割れちゃった？ いいよ、俺が片付けておくから風呂にでも入ってきなよ。パジャマとかまだ買っていないから俺のジャージでいい？ ……あれ？ っていうか、風呂入れるよね？ ……確か説明書にそう書いてあったけど」

「あ、あの……」

「もしかして入れないっけ？ 特殊防水加工がしてあるとか何とか

……」

「お、お風呂には入れます。人間とほぼ近い状態に作られていますので。それより、その……私が片付けますので……雲八様は、お先にお風呂に……」

「いや、いいよ。このくらいは俺にも出来るから」

そう言っでしゃがみ込んだ雲八は、カエデの目の前に散らばった皿の破片を集め始めた。カエデは暫くその場に立ち尽くし、それから消え入りそうな声で呟いた。

「……申し訳、ございません。私……役に立たなくて……」

雲八は一度、破片を拾う手を止めた。そして、振り返らずに、カエデの名を呼んだ。

「カエデ」

その真剣な声音に、カエデは一瞬緊張して声が出なくなった。

「は……い。なんでしょうか」

「……ダメだよ」

「え……？」

「自分の事を役に立たないとか、言っちゃダメだよ。君はもっと自分に優しくならなくちゃ」

その言葉は、カエデの傷ついた心に衝撃を与えた。……厳しく、そしてあまりにも優しすぎる言葉だった。

「……わ、わた……わたくし、は……」

何か言葉を紡ごうとしたが、舌がもつれて何もいえなくなった。暫くの沈黙の後……カエデの瞳から、透明な液体が流れた。ふと振り返ってその涙を見た雲八は慌てふためき、焦ったようにカエデの頭を撫でた。

「わっ！ ごめ……っ、その、ダメってというのは、ええっと……」

「ち、違います……すみません。……こういうの、慣れていないので」

「え……？」

「私は……以前の雇い主様から自分は役立たずなのだと教えられました。……ご主人様のように、優しい言葉を掛けてくださった方は、博士以来で……」

鼻をすするカエデ。雲八はそんなカエデの涙を、そっと片手の親指で拭ってやった。

「君は、役立たずなんかじゃないよ。だから、もう、そんなこと言っちゃダメだ」

第14話 安らぎ

結局破片の処理は雲八に任せて、カエデは湯船に浸かっていた。良い香りのする入浴剤。暖かいお湯。今までに経験したことのない安らぎを感じた。

それから、先程雲八に言われた言葉の意味を噛み締めた。

……自分はこの世界に存在していても良いのだ。自分がこの世界に生まれたことは、意味の無いことではなかったのだ。

心の中がむずむずして、言葉が上手く紡げなくなる。これが嬉しいという感情なのだ、とカエデは思った。

人間なんて大嫌いだった。人間を見るだけで体が動かなくなった。でも、変わるかも知れない。あの人と一緒にいれば……。

風呂から上がり、リビングへ戻ると雲八はテレビを観ていた。気配に気がついたのか、彼はこちらを見て、ああ、と小さく声を上げた。

「あがつたんだ。ジャージ、やっぱり大きいかな……。明日あたり
にでも、服買いに行こうか。他にも色々買わなきゃいけないし」

「……」

「あ、じゃあ俺、風呂入ってくるよ。眠かったら先に寝てていいからね」

雲八はそう言い置いて立ち上がると、扉の向こうに消えた。

カエデは静かにその場に座り、雲八が観ていたテレビをぼんやりと観てみた。どうやら、お笑い番組らしい。人間と違って複雑な感情が無いカエデには、芸人が披露しているネタが面白いのかそれとも面白くないのか、あまり理解できなかった。これ以上これを観ていても、何の得にもならないだろう。そう判断し、テレビの電源を切

った。

体の中から、小さな電子音が聞こえる。これは、そろそろ就寝した
ほうが良い、という合図だった。

第15話 悪夢

怖い 怖い 怖い 怖い 怖い

暗い部屋。タバコのおい。人の笑い声。自分の首や足に巻きつけられた鎖が、ジャラジャラと耳障りな音を立てる。誰かが自分を指差して笑う。誰かが何かこちらに向かって叫ぶ。

痛い。体中が痛い。頭が重い。足が動かない。目がかすれる。喉が痛い。嫌だ怖い助けてくださいお願いしますぐめんなさいやめてください

「いや……ご主人様……やめ、て……くださ、……」

「あ？　なんか言ったかあ？　おい、お前らもしっかり見とけよ、役立たずロボット解体の瞬間を！」

「や……、いやあ……っ」

「そんじゃ、開始しまーす」

耳元で、大きな電動ノコギリが音をたてて動き始めた。

「いやあああああああああああああああ！」

「……エデ。………カエデ！」
「！」

目の前に、心配そうな雲八の顔があつた。仰向けにベッドに寝転んでいることから、自分は部屋で眠りに落ちていたのだ、ということを感じ出した。

……今のは夢だったのだろうか。あまりにもリアルで、今自分がどこにいるのかすら、一瞬わからなくなつた。

「大丈夫？ ……びつくりしたよ。突然悲鳴をあげるから」

「……も、申し訳、ございま、……せ、ん」

「いや、俺は大丈夫だけど……。顔色、悪いよ？」

「へ……平気です。すみませ、でした……」

「本当に？ ……何かあつたら言いなよ？」

「はい……」

雲八は心配そうに、何度も振り返りながら部屋を出て行つた。そこでようやく、彼が自分の悲鳴を聞いてこの部屋に駆けつけてくれたのだと理解した。

全身汗だけで、髪の毛が額にはりついてしまっている。カエデはそれを右手で払い退け、改めて辺りを見回して安堵した。

ここは、あの男の部屋ではない。

第16話 呼び名

翌日カエデが目を覚ますと、既にリビングには朝食が用意されていた。

「……………」

「あ、カエデ。おはよう」

「……………おはようございます」

「パンはバター派？ それともジャム派？」

「どちらでも構いません」

「それじゃあ、ジャムで」

雲八は鼻歌を歌いながら、器用にトーストへジャムを塗り始めた。

「……………申し付けてくだされば、私が引き受けましたのに」

「はは、そうだね。今日はちょっと早く目が覚めたから。明日からはカエデにお願いするよ」

カエデは、雲八から手渡されたトーストを頬張った。甘みのある苺の香りが、口の中に広がる。

「今日は買い物に行こうか」

「……………買い物、ですか？」

「うん。色々買わなきゃいけないものもあるし」

「ですがご主人様、大学が……………」

「今日は休むよ。真面目に出てるし、単位はまだ平気だろ……………多分」

雲八はそう呟き、カエデに向かって微笑みかけた。

「じゃ、食ったら行こうか」

カエデは無言のまま、小さく頷いた。

「…………ご主人様」

「ん？」

「ご主人様は…………」

何かを言いかけたカエデだったが、すぐに彼女は口をつぐんだ。

「…………いえ、なんでもありません」
「？」

同じ大学生なのに、あの人とは随分雰囲気違いますね。
…………カエデは心の中でそう付け加えた。

「デパートはね、すぐその…………、あの大きい建物。歩いて5分くらいで着くから」
「…………はい」

食器洗いを済ませたカエデは雲八に返事を返し、タオルで両手を拭いた。

この日の天気は、快晴。マンションの外に出た瞬間、カエデはその空の青さに驚いた。

「うっわ、すごい晴れてるなー」

雲八は誰に言うでもなくそう呟き、眩しそうに目を細めた。

「じゃ、行こう」

「はい」

「あ、そうだ。あのさ、」

「はい？ 何でしょうか」

「えーと、その……」

雲八は少し照れ笑いを浮かべて、頬を掻いた。

「できればいいんだけどさ。“ご主人様”ってものの、別の呼び方にできないかな？」

「……構いませんが……何故でしょうか？」

「ええと……なんか、恥ずかしいんだよね。慣れてないしさ、こういうの」

「了解しました。何とお呼びすれば宜しいですか？」

「んー、……普通に、雲八でいいよ。その方が、同居人って感じがするでしょ」

その時、カエデの心の中に、何か良く分からない感情が芽生えた。カエデはその感情の正体に気づくことができなかったが、一応、頷いておいた。

第17話 人

デパートは酷く混んでいた。

右を見ても、左を見ても人しか見えない。

人の波に流されそうになり、雲八は両足をしっかりと地面にくっつけた。

「あちゃー……バーゲンセール、かな。ごめん、カエデ。いつもはこんなに……」

混んでないんだけど、と言い掛けた雲八の片手を、カエデの汗ばんだ手が突然握り締めた。

「え。カエ……デ？」

カエデは蒼ざめて体を小刻みに震わせながら、雲八の手を握っている。

沢山の人間を見て、また昔のトラウマが彼女の脳内に蘇ったのかもしれない。

雲八は慌ててカエデの手を強く握り返し、カエデの顔を覗き込んだ。

「カエデ……。大丈夫？」

カエデは雲八と繋いでいないほうの手を自分の額にもっていき、脂汗を押さえながら、小さく頷いた。

しかし、どう見てもカエデのその姿は大丈夫そうには見えなかった。

「カエデ、ちょっと人の少ないところに行こうか。4階だったら、子供の遊び場だから……多分、人も少ないと思う。多分ここよりは

マシだと思っよ」

「……は、はい……。すみません、ありがとうございます」
「うん、いいよ。行こう」

雲八は今にも倒れそうなカエデの手を引いて、人混みを掻き分けながらエレベーターに近づいた。

しかし、エレベーターの中にも沢山の人がいるのを見た雲八は、慌ててエレベーターから離れて階段に向かった。

「カエデ、歩ける？」

「はい、平気です……」

ふらふらのカエデを支えながら、雲八は1段1段慎重に階段を上った。

第18話 好奇心

4階では、小さな子供たちがはしやぎ回っていた。その子供たちの母親らしき人たちが、少し離れた場所にある椅子に座って談笑している。ここも静かだとはいえないが……先程よりは、まだマシだろう。

「ちょっとここで待ってて、カエデ。飲み物でも買ってくるよ」

「……」

「自販機、確か1階にあったと思うから……ちょっと遅くなるかも知れないけど、すぐ戻ってくるよ」

「……」

返事をせず、ただ震えているカエデを見て、雲八は、やれやれと自分の首筋をさすった。これは自分が困ったときの癖だった。とりあえず、今は彼女をそっとしておいた方が良さだろう。

「じゃ、行ってくる」

雲八はそう言い置いて、階段を下りていった。

カエデは、額に右手を当てたまま目を瞑り、その場に立ち尽くしていた。

気分が悪い……。人間が沢山いる。微かにタバコのおいもする。頭痛がしてきて、カエデの眉間に小さくしわが寄った。

その時だった。

「あれえ？ お姉ちゃん、不思議な目の色してるー！」

目の前で、誰かの声がした。ハツとして目を開けると、そこには大勢の子供たちがいた。子供たちは皆、好奇心いっぱいの瞳でカエデを見上げている。しかし、カエデにとっては、そんな彼らも“恐ろしい人間”でしかなかった。

「……っ」

更に蒼ざめて、後ずさるカエデ。子供たちは目を輝かせながら、カエデを壁際に追い詰めてゆく。

「ねえお姉ちゃん。なんでそんなに不思議な目の色なのー？」

「外国から来た人なの？」

「どうして？」

「ねえ、どうして？」

カエデの体が小刻みに震え出す。口に手を当て、カエデはその場に崩れ落ちた。足が震える。全身に鳥肌が立った。

「や……やめて……」

必死に声を絞り出すが、子供たちの耳には届かない。

「ねえ」

「どうしてー？」

「教えてよ、お姉ちゃん」

「いや……お願い、……やめて……思い出たく、ない……！」

カエデは大きく首を横に振りながら両耳をふさいだ。忘れた記憶が、また蘇ってくる。

第19話 漆黒の瞳

いつものように、暗闇の中で震えながら眠っていたあの夜。誰かの話し声で、目を覚ました。

「ねえ翼ー。ほんとに、面白いもんなんてあるのー？」

「ほんとだって！ ま、見りゃわかる」

その瞬間 …… 蛍光灯が、光を放った。あまりの眩しさに驚き、咄嗟に眼を瞑る。すぐ目の前から、聞きなれない女の声がした。

「うつわ！ すごい！ 何こいつ、人間？」

恐る恐る目を開けると、そこには派手な格好をした女性が立っていた。唇に大きなピアスをつけている。アイラインを濃く引いているためか、目が物凄く大きく見えた。

「ねえ、あんた名前はあ？」

「……ぜ、004号、です」

「へ？ 何？ ぜろぜろ……？」

後ろに立っていた男が、笑い声を上げて女に耳打ちした。

「こいつさ、ロボットなんだぜ」

「え？ ロボット？」

「ああ。すつげえだろ？ お前、言ってたじゃん。自分の思い通りになるヤツが欲しいって」

「……え！ じゃあ、もしかしてアタシのために買ってくれたの？」
「決まってるんだろ」

「やあ〜んっ！　ありがとう翼あ！」

知らない女性。香水の香り。彼女の瞳に移る、自分の顔……。カエデはその全てに怯え、震えながら後ずさった。

「ねえ、翼あ」

「なんだよ」

「この子、可愛いけどさー……あたしの好みじゃないなあ〜」

「はあ〜？　何でだよ」

「あたし、細かい装飾が地味なオモチャ、嫌いなんだよね〜」

「細かい装飾？」

“雇い主”がそう呟いて片眉を上げると、女性は意味ありげに微笑み、頷いた。

「そう。例えば　……」

女性が指差したのは、……カエデの瞳だった。

「このへんとか、ね」

その当時、カエデは美しい漆黒の瞳をしていた。女性はそれを『気に入らない』と言ったのだ。その言葉の意味を理解したカエデは、両目を大きく見開いた。

「……な、何を……言って、」

舌がもつれて、急速に喉が渴いて、声が出なくなった。あまりの恐怖に、目の前が真っ暗になる。

カエデのその反応を見て、“雇い主”も理解したようだ。

「ああ、……なるほど。お前、結構エグいこと考えるよなあ」

「あははっ！ 翼には敵わないよぉ」

“雇い主”がカエデの前にしゃがみ込んで、口の端を吊り上げて嗤った。

「俺のカノジョがこう言ってるんでね。……悪いけど、協力してもらうぜ」

今でも、その時のことは鮮明に思い出すことができる。彼の瞳は酷く濁っていて、世界の悪いものを沢山吸い込んできたような色をしていた。

「いや……嫌です！ 一体、何をするつもりですか！」

「ま、すぐわかるって。おい、引き出しからカッター出せ」

「わかってるって。……はいっ」

女性は楽しそうな笑顔を浮かべ、机の引き出しの中からカッターナイフを取り出した。

「じゃ、ちょっと痛エかもしれないけど、こいつの為なんで我慢してくれよ」

小刀を握り締めたまま、近寄ってくる彼。

「何それ！ もお、翼あ。アタシのせいにしないでよねえ」

彼の後ろで、大きな笑い声をあげている彼女。

「いや……やめてください！」

逃げようとしても、勿論無駄だった。手足につけられた鎖が、がしやりと音を立てて自分の体を壁に引きつけた。

「そいつ、押さえてろよ。朱音」

「はいはいっ」

「嫌！ 嫌っ！ 離してください！」

第20話 造られた人間

その夜 …… カエデは、漆黒の瞳を失った。

「っ……………」

床に突っ伏して、声にならない声をあげるカエデ。全ての景色を失った両目。 …… 説明すら出来ないほどの激痛が彼女を襲う。

「声も出ないくらい痛いみたいねー」

「そりやそうだろうな。でも、壊れなくて良かったぜ。正直こんなことしたら、精巧なロボットってのは壊れると思ってたからよ」

「うん。壊れなくてよかったあ。 …… でもまさか血まで出るようになってるなんて、アタシちよつとびつくりしちゃった」

「偽物だから怖がる必要はねえよ。血のりみてえなもんだ」

「ふーん」

2人の会話が、どこか少し離れた場所から聞こえる気がした。あまりの痛みで両耳の機能までも鈍ってきたようだ。

ここにきてから、痛みには慣れたと思っていた。それなのに……。

「で、この子どうすんの？ 翼」

「まあそう慌てるなつて。お前のことからこういうこともあるかと思つて、そういう系の専門店探しておいたんだよ。こいつを買つた場所じゃ、どうせ開発者のジジイがなんでこんなことになった、とか詳しく聞いてくるに違いねえからな。それより、朱音。こいつの目の色何色にするか決めるよ」

「え、アタシが決めていいんだ？ じゃあ…… 赤と青とかどう？ 結構オシヤレじゃない？」

「赤と青？」

……うん、いいかしんねえな」

小さく笑い声をあげたその男は、カエデの髪の毛を掴んで、こう言
った。

「いかにも、“造られた人間”って感じで」

第21話 修理

それから、暫くの間カエデは気を失っていた。どれ程時間が経ったのかはわからない。目が覚めたら知らない店のソファの上に寝かされていて、先程まで痛みしか感じなかった両目には再び光が戻っていた。

「目が覚めたか？ ロボットさん」

振り返ると、何度かどこかで見たことがある中年の男性が立っていた。

「……あなたは……確か、博士の……」

「ああ。驚いたな、覚えてるのか？ 大野博士の弟子だった、東山だ。お前が造られた日に一度大野博士の研究室で会っただけだから、もう忘れてしまっていると思うていたよ」

東山は片手で眼鏡を押し上げ、カエデの瞳を覗き込んだ。

「両目はちゃんと見えるか？」

「……はい。問題ありません」

「そうか。それじゃ、仕上がりの方を確認してくれ」

手鏡を手渡され、恐る恐る自分の顔を見る。……その瞬間、カエデは、自分の瞳の色が変わった事を知った。

「……」

震える指で、鏡の中の自分の瞳を撫でるカエデ。いつの間にか溢れ

出した涙が、鏡に落ちていった。

カエデは、黒い瞳が気に入っていた。大野博士が造ってくれた証、あの研究室でうまれたという証、それが1つ消えてしまった。残念で堪らなかった。

声をあげずに泣き出したカエデを見て、東山は辛そうに目を伏せた。

「……ロボットさん」

返事を返すことができず、カエデは泣きじゃくりながら東山の方を向いた。

「……この店は、他の研究所に持ち込むことのできない理由のあるロボットを、極秘に修理するための場所なんだ。よっぽど辛いことがあったんだろう？ 両目を潰されて連れてこられるロボットなんて、今までここで商売してきて初めて見た。でもな、……今言ったように、ここは依頼人の意思を尊重して、他の研究所にお前さんのデータを漏らすことはできないんだ。……たとえそれが、師匠の研究所のロボットだったとしても」

東山は必死に言葉を選びながら説明しようとしているが、かいつまんで言えばこういうことだ。

004号がもし雇い主に暴行を加えられていたとしても、それを外部に漏らすことはできない。つまり、誰にも助けを求めさせることができない。

「……依頼人、あんたの雇い主さんな。そろそろ迎えに来ると思うぜ。準備しときな」

「……はい」

東山は、頬に残ったカエデの涙の跡を指先で拭い、消え入りそうな声でこう言った。

「悪いな、俺は、大野博士のような偉大な人物にはなれなかった。

……弟子失格だ。俺みたいな人間は、こういう仕事しないと、今の世の中で生きてはいけないんだ」

カエデは小さく頷き、視線を床に落としたまま店の入り口に立った。そして、東山の方を振り返らず、吐き捨てるように呟いた。

「……いいんです。人間の汚いところは、嫌というほど見てきましたから」

誰も、助けてはくれない。

第22話 暴走

気がつくと、カエデの両目からは涙が溢れ出していた。

……そうだ。誰も、助けてなんかくれなかった。

「あれ……」

「お姉ちゃん？」

「どうして泣いてるの？」

どんなに辛くても、苦しくても、誰も助けてくれなかった。

「お母さん！ お姉ちゃんが泣いちゃったよお」

「あつ！ ゆうちちゃん、このお姉ちゃんに何したの！」

「なんにもしてないよう。急に泣いちゃったの」

「なんにもしてないなんてこと、ないでしょ？ ほら、お姉ちゃんに謝りなさい！」

目の前で何か言っているこの親子も、人間。人間は何もしてくれない。人間は、薄汚い考えを持った自己中心的な生き物なのだ。カエデは憎しみのこもった瞳を親子に向け、片手を振り上げた。

「！」

何者かの温かい手が、振り上げたカエデの手を掴んだ。驚いて振り返ると、そこには笑顔を浮かべた雲八の姿があった。

「……雲八、様……」

「カエデ、お待たせ！ 飲み物買ってきたよ」

雲八はすぐに親子の方に顔を向けて、小さく頭を下げた。

「この子、外国から来たばかりで、まだあまり日本語を理解できないです。多分、沢山の人に声を掛けられて驚いてしまったのだと思います。驚かせてしまつてすみませんでした。……それじゃあ、失礼します」

雲八は優しくカエデの手を握ると、何も言わずに、屋上へ続く階段を上り始めた。

カエデは少し戸惑いながらも、雲八の手をしっかりと握って、その後についていった。

第23話 屋上

2人は屋上にやって来た。今日は風が強く、少し肌寒い。雲八に渡されたりんごジュースを手にしたまま、カエデは俯いて壁にもたれかかっていた。雲八はここに来てから地面に座り込んで、すっかり口を閉ざしてしまっていた。

「……………」
「……………」

沈黙。

風の音だけが2人の耳に届く。

「……………」
「……………」

雲八がこんなに静かになってしまったのは、きっと自分のせいだ、とカエデは思った。こんなに扱いにくいロボット、そばに置いておきたくなかったのかも知れない。更に落ち込んだカエデは、溜息を吐いて赤くなった瞳を擦った。

「……………ごめん」

数分後、不意に聞こえた、雲八の声。

「……………？」

慌てて顔をあげて、雲八の方を見る。雲八は立ち上がり、カエデの方に近寄ってきた。

「反省してるんだ」

「……反省？」

「……うん」

雲八は、いつものように優しくカエデの頭を撫でて、すまなそうに呟いた。

「こんな人が多いところに、君を連れてくるべきじゃなかったよね」
「……え」

意外な言葉に、カエデは言葉を失った。てっきり、“君を買ったのは間違いだった”とでも言われると思っていたからだ。

「さっさと買い物済ませて、帰ろう」

「……は、はい……」

「必要なものだけ買おう。君の着る服と、今日の夕飯の食材」

「わ、わかりました」

「それじゃあ、行こうか」

雲八は笑顔でカエデに手を差し伸べた。

カエデは、思わず笑みを浮かべて、大きく頷いた。

「……はい」

第24話 芽生えた感情

帰る頃には、太陽は真上にまで昇っていた。丁度お昼時らしい。

「家に帰って、何か食べようか」

「はい。今日買った材料で、ハンバーグなら作れると思います」

「お、ハンバーグ？ 俺、好きなんだよね」。楽しみだなあ」

嬉しそうに笑う雲八。その笑顔がいつにも増して輝いているように見えて、カエデは首を傾げた。

「雲八様」

「ん？」

「……何か良い事があったのですか？」

「え、なんで？」

「なんだか……、ご機嫌が良さそうなので」

「はは、わかる？」

雲八は笑顔のままでカエデの顔を覗き込んで、優しく目に細めて、こう言った。

「カエデがやっと笑ってくれたから、嬉しくなっちゃって」

その笑顔を見た瞬間……カエデは不思議な感覚を味わった。

それは、心がまるで何かに締め付けられたような感覚だった。

一体これはなんなのだろうかと必死に頭を回転させて考えてみる。しかし、答えは出てこなかった。

「……雲八、様？」

「え？ 何？」

「あの、……私が笑うと、雲八様は嬉しいですか？」

「へ？ どうしたの、突然」

「いえ……少し、気になって」

雲八は不思議そうな顔をしながらも、少し顔を赤らめると、小さく頷いた。

「……うん、嬉しいよ」

その返事を聞いたとき、カエデの胸は高鳴った。何故なのだろう。……わからない。

「雲八様」

「ん？」

「あの……わ、私も……同じです」

「……何が？」

「私も、雲八様の笑顔を、見ると……嬉しい、です」

あの感覚は“嬉しい”のとは少し違うような気もしたが、雲八は自分の笑顔を見た時の感情を“嬉しい”と表現した。つまり、自分のこの感情もきつと、それと同じなのだろう。カエデは取り敢えず納得して、1人で頷いた。

第25話 鳥

部屋に戻つてくると、カエデはすぐに食事の準備に取り掛かった。
……いつも雲八が歌っている鼻歌を口ずさみながら。

「雲八様、すみません。ケチャップを取って頂けますか？」

「あ、うん。はい」

目の前に置いてあつた赤い調味料を手渡すとカエデは、ありがとう
ございます、と雲八に頭を下げ、出来上がったハンバーグにそれを
かけた。まだ出来立てで、熱々のハンバーグ。美味しそうな匂いが
部屋中に漂っている。

「ご飯とお味噌汁は出来ていますので、これから準備致します。雲
八さまは向こうでお待ちください」

「わかった。じゃあ、よろしく」

雲八はカエデのその言葉に素直に頷いて、居間の方へと消えて行っ
た。

カエデはご飯を器によそいながら、小さく微笑んだ。

博士。人間の中にも、こんなにも優しくて温かい人がいるの
ですね。

「……あ、」

ご飯を盛る手を止め、カエデは窓の外を見た。……曇りガラスの向
こうに、黒い物体が動いているのを見つけたからだ。カエデは静か
に窓を開けると、そこに居る生き物に向かって笑みを浮かべた。

「……カエデー、やっぱり運ぶのくらい手伝おうか？」

そう言いながら台所へ入ってきた雲八は目を丸くした。カエデはとても幸せそうな顔をして、窓の外を眺めている。

「カエデ？」

首を傾げながらその顔を覗き込むと、カエデはハツとしたように雲八のほうを向き、あつと小さく声を洩らした。

「お待ちせして申し訳御座いせん、雲八さま。い、今すぐ準備します！」

「いや、別にいいよ。それより……何見てるの？」

「……あの子、です」

カエデが指差したのは、目の前の電信柱から伸びている電線だった。その電線の上に、とても綺麗な色をした、見たことの無い小鳥がとまっている。

「うわ！　すげえ……」

雲八はその美しさに、思わず目を細めて感嘆の声を洩らした。その言葉が嬉しかったのか、カエデは目を輝かせて頷く。

「あの子、私がここに来たときからこの窓に遊びに来てくれるんです。どこから来た子なのかはわかりませんが、とても可愛らしくて……。 ついつい、少しご飯を分けてあげたりしているうちに、仲良くなっただんです」

「へえ、そうなんだ」

「……はい。あつ、あの……すみませんでした。勝手にご飯を分けてあげたりしてしまって……」

「いいよ、あいつも喜んでるだろうし。それにしても綺麗な色した鳥だなあ……。どこから来たんだろ」

「わかりません……。気がついたら、遊びに来てくれるようになりましたが……」

2人は暫くそのまま、ぼんやりと窓の外を見つめていた。美しい小鳥は、嬉しそうに電線から空へ飛び立ったり、再び電線に戻ったり、時には2人が見ている窓のすぐ近くまで飛んでみたりと、せわしく動き回っていた。その姿を、まるで我が子を見る母親のような優しい目で見つめていたカエデは、ふと思い出したように片手を口に当てた。

「……あ！ ごめんなさい。ご飯、すぐにお運びします。少々お待ちくださいね」

カエデは雲八と目が合うと、微かに微笑んだ。雲八もその笑みを見て、自然と笑顔になる。

「わかった、待ってるよ」

第26話 友達

その翌日、カエデは部屋の掃除をしていた。部屋の中が綺麗になると、心の中まで綺麗になるような気がして何となく嬉しい。

ふと時計に目をやると、針は午後5時を指していた。雲八は大学に行っている。……そろそろ帰って来る時間だろうか。

それから数分ほどテーブルを拭いていると、玄関の方で物音がした。

「……雲八さま？」

すぐさま玄関に向かい、その声をかける。すると間髪を入れずに扉が開いて、返事が返ってきた。

「カエデ、ただいま」

雲八の笑みを見た瞬間、カエデはふっと心が安らいだような気がした。彼の笑顔には、自分を安心させてくれる何かがある、とカエデは感じていた。

「おかえりなさい。お鞆お持ちしましょうか？」

「あ……いや、……ええと、その。……ちよつといいかな」

「はい？」

首を傾げた瞬間、玄関の扉の向こうに雲八以外の誰かの気配を感じて、カエデははっと身構えた。

雲八は慌てて扉を少し閉めて、小さな声でカエデにこう説明した。

「あのさ、実は同じ大学に高校時代からの友達がいるんだけど、遊びに来たいっていうから連れて来ちゃったんだ。もしカエデが嫌だ

って言うなら帰って貰うけど……どう、かな？」
「……」

口を閉ざし俯いてしまったカエデを見て、雲八は酷く焦ってしまった。頭を掻き、カエデの目を見たり少し焦点をずらして部屋の壁を見てみたりと、無意味な目線の動きを繰り返す。

「あ、ええっと……悪い人じゃないから安心して。カエデのことは親戚の子だって説明してあって……、」

「……です」

「えっ？」

カエデは小刻みに震える手を胸の前で握り締めて、精一杯笑みを浮かべた。

「く、雲八様のお友達なら、大丈夫です。私も以前よりは人に対して免疫が出来ましたから」

「……本当に？」

「はいっ」

明らかにカエデは無理をして笑みを作っている。雲八はそのことに薄々感づいていたが、正直今更友人を追い返すことも出来ず、カエデの言葉に甘えることにした。

「そう？ 良かった。それじゃあ、入ってもらおうから」

「は、はい……」

カエデは少し後ろに下がり、こくりと唾を飲み込んだ。雲八は申し訳なさそうにごめんと呟いてから、玄関の扉を開け、外で待っている人物を招き入れた。

「それじゃ、入って。あ、あんまりうるさくするなよ。親戚いるから」

「はいはい！ わかってるってー」

その声を待っていたかのように元気良く返事をしながら入ってきたのは、小柄な女性だった。友達、という言葉から何となく男性をイメージしていたカエデは少し驚いて目を丸くする。それでも、粗相の無いように迎えなければ、と強張った頬の筋肉を無理矢理ほぐし、引きつった笑みを浮かべてその女性を見た。

「……い、いらっしやいませ」

そんなカエデを見て、女性はぱつと目を輝かせた。

「きゃあ！ もしかしてこの子が雲八の言ってた親戚の子？ 可愛い子ねー。あんたと同じ血筋だなんて想像もできない！」

「……それ、どういう意味だよ」

雲八は軽く女性の頭を小突き、苦笑いする。

「いったあ。もう、オンナノコに手を出しちゃ駄目でしょ、馬鹿八！」

女性は頭をさすりながら雲八にそう言って舌を出すと、素早くカエデの方に向き直って笑いかけた。

「あたし、モカっていの！ よろしくねー！」

「……あ……は、はい。わたくしはカエデと申します。宜しく願います」

「きゃ あああもうほんとかわいい！ この子あたしの妹にする！」

冗談っぽく笑いながら、モ力は勢い良くカエデに抱きついてきた。
カエデは一瞬びっくりして心臓が止まりそうになったが、なんとか
冷静を装ってモ力を受け止めた。

第27話 嫉妬

興奮してカエデに頬をすりよせるモカ。カエデは困惑し、どう対処すべきか必死に頭を回転させる。困っていることに気がついてくれたのか、雲八がモカの肩を叩き、言った。

「モカ。コーヒーでも飲む？」

「あ、ほんと？　ありがと！　えっとね、ミルクだけでいいよー」

モカはカエデから体を離すと、こっちがキッチン？　と言いながらどたどたと部屋の中へ入っていった。

「……お前、ほんとお構いなしだなあ……。まあ、いいんだけど」

雲八は苦笑しながらそれに続いて部屋の中へ消えて行った。そしてカエデはというと、暫くそこに呆然と立ち尽くしていた。

自分の中に、今まで感じたことの無い不思議な感情が芽生えたからだ。この感情は何なのだろう？　解らない。分析してみると、悔しさに似た感情のようだった。

カエデは分析を諦めて溜息を吐き、頬に片手を当てて、ふと気づいたように天井を見上げた。

（……そうだ。……私は……、）

ロボット、だった。

人工的に造られた肺で呼吸し、人工的に造られた心臓を動かして生存している。最近、雲八が自分を人間のように扱ってくれる為、その事実をすっかり忘れていた。

嬉しさ、悲しみ、怒り、苦しみという感情は最初から自分の中に組

み込まれている。悔しさは、以前の雇い主に殺された時、自分自身で気づいた。だが自分は、まだ分からない感情だらけなのだ。

人間なら、きっとこの感情の名前がわかるのだろう。でも、自分には解らない。

ああ、なんなんだろう。この、悔しさに似た、悲しみのような、不思議な感情は……。

雲八の笑顔が他の人間に向けられているのが悔しいと思った。自分の知らない人と親しげに喋っているのを見るのが悲しいと思った。一体これはなんなのだろう。

(……私……故障してしまったのだろうか)

胸が苦しい。……張り裂けそうなくらい、痛い。カエデはぎゅっと両目を瞑ってその痛みに耐えようとした。

「カエデちゃん」

自分の名前を呼ぶ、モ力の声。カエデはその声で我に返り、慌てて返事を返した。

「は、はい！」

「こつちにおいでよー！一緒に喋ろー？」

「了解しました」

急いで部屋に向かい、手招きしているモ力のすぐ隣へ腰掛ける。モヤモヤしたその感情は、未だにカエデの心の中を支配していた。モ力はそんなカエデをよそに、笑顔で雲八の背中を叩く。

「ねー、雲八さあ、知ってたー？」

「……へ、何を？」

「あたしねえ、実は高校のとき、あんたのこと好きだったんだよー」

「……え、」

瞬きを繰り返して、言葉を失う雲八。一瞬室内が静かになりその沈黙は、モ力の笑い声に打ち破られた。

「きゃはははっ！ 昔のハナシじゃあーん！ 何動揺してんの！ それとも何？ 嬉しすぎて言葉も出ないって？ ん？ ん？」

「い、いや……。別に嬉しいとかそんなんじゃないけど、意外だなと思ってさ」

「意外って、何が？」

「だってさ、俺らの間ではお前はD組の吉田が……」

「ええ〜？ 吉田とかありえないでしょ！ あんたたち、どんな頭してんのよー！」

2人は、カエデの知らない話で盛り上がっている。カエデは黙って絨毯に目を落としていた。……胸の痛みが、強くなっていく。

「……あ。そうそう、カエデちゃん！」

「……！」

急に名前を呼ばれ、カエデは慌てて顔をあげた。

「ふふつ。雲八にね、カエデちゃんは高校生だって聞いてたから、本屋に寄っていいもの買ってきたんだ！ ……ちよっと待ってね」

モ力は妖しい笑みを浮かべて鞆をあさり始めた。そしてその中から3冊の漫画の単行本を取り出すと、それをカエデに手渡した。

「はい、あげる！」

「え……、え？」

「これね、今中高生の間ですごい人気のある漫画なんだよ。なんかねえ、泣ける恋愛モノらしいから、読んでみなよ！」

「そう、なんですか……。ありがとうございます」

「いいっていいって！」

モ力はこのこと笑みを浮かべてそう言うと、このコーヒー美味しいねー、どこのやつ？ と雲八に尋ねながらコーヒーをすすり始めた。

「てかさ、雲八。こないだ駅前に出来たパン屋さんなんだけど

……って、あつ！ もうこんな時間じゃん！」

モ力は腕時計に目をやって悲鳴をあげ、

「ごめん雲八、カエデちゃん！ あたしこれからバイトなんだ。帰るね！」

と早口で言って、慌てて立ち上がった。

「送ろうか？」

「え？ あ、ううん。ひとりで帰れるから平気。じゃあね、カエデちゃん！ あと、ついでに雲八！」

「つ、ついでってお前……。気をつけるよ！」

「うん！ そんじゃね！」

モ力はもう一度カエデに手を振ると、風のように去っていった。しまった。

第28話 買い物

それから数日後のことだった。その日カエデは、近所のスーパーまで買い物にやって来ていた。

（卵を1パック……それからお肉と野菜も）

購入するものをメモした紙を見ながら、卵売り場へ向かう。

「あら、お姉ちゃん可愛いわねー。ネギ、お安くしとくけど、いかが？」

少しふつくらとしたおばさんに笑顔で話しかけられ、カエデは一瞬戸惑ったように視線を泳がせた。しかし、すぐに笑みを浮かべ、小さく頷く。

「……ありがとうございます。……それじゃあ、一束ください」

雲八と暮らすようになってから、カエデは、なるべく人間に心を開いていこうと決めた。自分から殻に閉じ籠っていてはいけない。彼と同じように優しい人間は、きっと自分の身の回りにも沢山いる。

（こんな風な考え方ができるようになったのも、雲八さまのお陰……）

おばさんからネギの入った袋を受け取りながら、カエデはそう思った。

大分買いすぎてしまった、とカエデは心の中で呟いた。重いビニール袋が体力を奪う。……そろそろ、家に帰ったほうが良いかもしれない。

すぐ傍に、丁度良く小さなカフェがあった。その店内の壁に時計が掛かっている。カエデはその時計で時間を確認しようと、店内を覗き込んだ。

「……！」

その瞬間……カエデは、持っていたビニール袋をその場に落としてしまった。中に入っていた卵のパックが割れ、中身がアスファルトに流れていく。通行人が怪訝な顔をしてそれを見つめながら次々と通り過ぎて行った。

「……い、嫌……っ」

小さくそう呟いたカエデは、慌ててそこから駆け出した。

第29話 雇い主

カフェにはたくさんの人間がいた。女子高生、サラリーマン、OL……。カエデが店内を覗いた瞬間、その中で、目が合った男がいたのだ。その男の顔に、カエデは見覚えがあった。

そう、それは……、以前の雇い主。

見間違えるはずがない。絶対に、あの人だ。今までずっと、あの人の顔を忘れたことなどなかった。忘れたいのに、忘れられなかった。目を瞑れば、口の端を吊り上げて笑う彼の顔が浮かんでくる。

夢の中で、自分は何度も何度も彼に殺された。実際に現実でも、酷いことを沢山された。……あの時の雇い主がカフェに居て、あろうことが目が合ってしまったのだ。

「はあ、はあ、……はあ」

カエデは必死に逃げた。靴が片方飛んでいても、誰かに肩がぶつかっても、振り返りもせずに。そんなカエデを不思議そうに見つめる小学生たちと擦れ違う。ホームレスの人たちが、首を傾げながらカエデを見ている。

「はあ……はあ、はあっ……」

カエデは人気のない雑木林の中に逃げ込んだ。それがどんなに危険な行為か、彼女にはわからなかった。

「はあ、……はあ……」

汗を拭い、隣の大木に寄りかかる。

（ここまで来ればもう、大丈夫……）

大きく息を吐き出し、両目を瞑ったその時だった。

背後に何か、否、誰かの気配がした。慌てて振り返る。……が、遅かった。

次の瞬間、側頭部に鈍い痛みを感じた。視界が霞む。真っ直ぐその場に立っていられなくなった。頭の中の何かの機能がショートしたのかも知れない。

そのまま……カエデの意識は途絶えた。

第30話 二度目の監禁

カエデが目覚めたとき、辺りは暗闇に覆われていた。ひやりとした冷気が、カエデの頬を撫でて通り過ぎていく。ビリビリと体中に電流が走っているを感じた。頭の中で作動していたどこかの回線が切れてしまったのかも知れない。とにかく、体中が酷く痛かった。ここはどこなのだろう。

「……くも、はちさ……ま……」

この部屋に、彼はいない。そう確信しているはずなのに、不思議と彼の名前が口から転がり出た。

暗闇にそつと片手を伸ばす。その手は冷たい空気に触れただけで、すぐ重力によって自分の隣へ落ちてきた。

「雲八さま、」

先程よりも少し声を大きくして、雲八を呼んだ。彼からの返事は無い。

「雲八さま……」

あの優しい笑顔と声を求めて、カエデは痛みの走る体を起こそうと躍起になる。

カエデの腹部を誰かの足が蹴り上げたのは、まさにその瞬間だった。

「うあっ！」

その衝撃に、悲鳴をあげて反射的に体を縮める。腹部を蹴られたこ

とによる息苦しさを何度か咳を繰り返し、思わず顔をあげてしまったカエデは息を呑んだ。

「……ご主人……様……」

カエデを見下ろしている、ニヤついた顔。それでもカエデにとってその顔は、おぞましい死神のような顔に見えた。死神の口許が更にたたりと歪められ、その唇からもう二度と聞きたくなかった耳障りな声が紡がれて、カエデの鼓膜を震わせた。

「よお、久しぶりだな。糞ロボット」

「……」

恐怖で、声が出ない。背中を床にはりつけるような格好のまま、じつと男の顔を凝視する。

「覚えてるか？ 俺の事。……ま、忘れてるわけがねえか。散々可愛がつてやったもんな？」

不意に自分の目線の高さまで男の顔が近づき、カエデは更に体を強張らせた。男は張り付いたようなおかしな笑顔を浮かべたままカエデの長い髪に手を伸ばし……それを、容赦なく自分の方へ引き寄せた。頭皮と共に剥がれようとする毛髪。その痛みにカエデは必要以上に驚いてしまい、情けない悲鳴が口から漏れた。その反応が面白かったらしく、男は続いてカエデの頬にもう片方の手を伸ばし、白く柔らかいそこに鋭く爪を立てた。

「っ……！」

その痛みに顔を顰めて、昔のように思わず謝罪の言葉を言いそうに

なったカエデだったが、それを堪えながら唇を噛み締め、男を睨みつけた。カエデのその憎しみのこもった瞳を見た男は、不機嫌そうに低い声を出して再びカエデの髪の毛を強く引いた（痛そうに顔を歪めはするものの、カエデはもう悲鳴をあげなかったが）。

「……んだよ、その目。俺に反抗する気か？ ロボットが人間様にたてついて良いと思ってるのかよ」

カエデは強く強く唇を噛んだ。そうでもしていないと、今にも恐怖で涙が溢れ出してしまいそうだった。

「……わ、私は……っ……ロボットです、でも……私には心が、あつて……。だから、……」

言葉が、上手く口から出てこない。この男に言いたいことはそれはもう数え切れないくらいあるというのに、自分にはその全てを正確に伝えることが出来ない。その事実が、ただ悔しかった。

恐怖心を抑えるために、男の瞳から目を逸らさない。狂気に満ちた男の瞳には、唇を噛んだままのカエデの姿が映っている。

「……はっ」

男は片手を額に持つていき、くっくくく、と喉の奥から笑い声をあげた。

「お前、あんなに俺に痛い目に遭わされておいて、まだ人間様の恐ろしさを理解できて無いわけ？ 本当頭悪いな。流石人工的に造られた頭脳だな。覚える知能なんてないわけか」

その見下した言い方と物凄く不愉快な口振りは、昔雇われていたと

きと全く変わっていない。カエデは男の瞳を睨みつけたまま、震える声で必死に抗議した。

「……も、もう私は、貴方の私物ではありません。貴方のように鬼畜な人間ばかりではないと、新しい雇い主様が教えて下さいました。どんな事をされても……人間を“怖い”なんて、に、二度と思いません！」

「震えながら何言っただよ、ばーか」

どうやら気を悪くしたらしい。男は額に薄く青筋を浮かべて、カエデの脇腹を足先で蹴り上げた。メキツという音と共に、ずっと電流が流れているような感覚がしていたカエデの体が更に悲鳴を上げてスパークする。

「あ、う……っ」

脇腹を押さえ、必死に酸素を取り込みながら呼吸を繰り返す。そんな彼女を冷たく見下ろし、男は言い放った。

「お前は人間じゃねえんだ。いいか……？ この世界で一番偉いのは人間様なんだよ。良く覚えておけ」

カエデは何も言わず、涙の浮かんだ瞳で男を睨みつける。暫しの間の後、男が口の端を吊り上げて笑った。

「お前、覚えてるよな？ ……俺に殺された夜。あの日俺に協力してくれたダチが、ずっとお前に会いたがってたんだ。さっそくこれからそいつに電話してきてやるよ。わざわざ造り直されたみたいだが、残念だったな。そいつらと一緒にお前をもう1度、完全に殺してやるよ」

男は笑い声をあげながら、部屋から出て行った。
この部屋の向こうには電気が点いているらしい。薄い明かりが一瞬
だけ部屋の中に漏れたが、すぐに扉によって遮断された。

第31話 鎖

カエデは額に脂汗を浮かべたまま、体を捻って部屋の中を見回した。相変わらず部屋は暗いまだだった。しかしカエデの瞳は大分その闇に慣れてきていたので、室内にあるものが何なのかは大体把握できた。

移動してみようとして、気がついた。自分の両足には硬い金属で出来た鎖が、ぎつちりと巻きつけられていたのだ。

それは足を開くこともできないようにしっかりと両足を結びつけて、離さない。いくら足首に力を入れてみても、それは解けそうに無かった。

溜息をひとつ吐いて、カエデは鎖を解くことを諦めた。

煙草の臭いが染み付いている、カーテンの閉め切られた部屋。この部屋は昔カエデが雇われていた頃からほとんど変わっていないかった。変わったことといえば、本棚の位置が少し窓側にずれているくらいだ。

嫌でもあの日のことを思い出す。あの夜、自分はここで殺されたのだ。

暗い部屋、家具や服に染み付いた煙草の臭い、数人の男たちの笑い声、電動のこぎり……。

電動のこぎりが、音を立てて動き始める。自分の体が、無機質な音を放つその機械によって切り刻まれていく。細かく、もつと細かく。まるで再び死にのみこまれてしまったのかと錯覚するほど、その映像はとても鮮明にカエデの脳裏に浮かび上がり、どうしても消えてくれない。

暫くしてようやく我に返ったカエデは、慌てて首を横に振った。
だめだ、思い出してはいけない。思い出して恐怖に苛まれるよりも先に、自分にはやらなければいけないことがある。

カエデは膝を折り曲げたり伸ばしたりしながら、芋虫のように奇妙な格好でのそのそと壁から離れた。

扉の近くで、微かにあの男の笑い声がする。その笑い声を聞いた瞬間、再びカエデは恐ろしさで体が竦みあがった。

この薄い壁を隔てた向こうに、あの男がいるのだ。奇妙な行動をしていることがバレたら最後、きつともう二度と雲八の元へは戻れない。

なるべく音を立てないように静かに行動しようとカエデは決意した。息をするのも躊躇われるようなその静寂の中で、足首に巻きつけられた鎖ががしりと大きな音を立てたのを聞いた。

「！」

息を潜め、扉の外の様子を確認する。男はどうやら友人との会話に熱中していて今の音に気がつかなかったらしく、扉の外からは先程よりも若干大きくなった彼の笑い声が聞こえただけだった。

「……」

大きく安堵の息を吐き出し、あまりの恐怖で涙目になってしまった目を、のろのろと後ろへ向ける。

足首に巻かれた鎖は、壁から突き出している棒状の不思議な物体に固定されていて、これ以上は進めないようになっていた。

第32話 携帯電話

すぐごと後退し、頭を抱える。こんなに行動できる範囲が少ないのに、どうやって逃げる方法を考えれば良いのだろうか？

目の前に窓があるが、ここは9階なので飛び降りることも出来ない。否、鎖があるのでそれすらも行動には移せない。

（早く、考えなくちゃ……。早くしなくちゃ、私は……）

再び殺されてしまうことも、勿論怖かった。だけどそれよりももっと怖いのは、雲八に嫌われてしまうこと。

雲八は知らない。自分が何故家に帰っていないのかということも、何故夕飯が用意されていないのかということも。こうして捕まって再び破壊されたとしても、何も知らない雲八は“カエデが出て行ってしまつて、帰つてこなくなった”と考えることしか出来ないだろう。

そうしたら雲八は自分のことを軽蔑視するかも知れない。考えたくはないけれど、“拾つてやったのに、あんなに優しく扱つてやったのに、どうして”と勝手な自分を恨むかも知れない。

あの優しい雲八がそんな事を考えるはずはないと心の中で必死に否定してみるが、逆に自分を置いて雲八がいなくなったときの事を想像してみたら、彼に対して怒りの言葉しか出て来なくなることを知つてしまつた。

ああ、許せない。あの男から逃げ切れなかった自分が、記憶の中の優しい雲八を想像で汚してしまう自分が、許せない。

自己嫌悪に陥つたカエデは両手を床に置いて、その両手をただひたすらがむしゃらに動かした。何か見つけなければ。この部屋から脱

出できるような何かを。

部屋の中は案外綺麗だったので、全く物音はしなかった。しかし更に激しく両手を動かしたその瞬間片手は何かふにやりとしたものに触れ、それが指に引つかかって少し動いたとき、ガチャガチャと不思議な音が聞こえたのが分かった。手探りでなるべく音を立てないようにそれを自分の元へと引き寄せたカエデは、ぎよっとして目を見開いた。

「……これは……」

それはどうやらガラス製の、割れた写真立てのようだった。粉々になった破片が、無造作にビニール袋に入れられている。そのビニール袋の中には破片に混じり一枚の写真が入っていた。カエデはそれを袋の中から拾い上げ、その顔を見て驚いた。

その写真には、幸せそうな笑顔を浮かべて肩を並べている、今カエデを監禁している男と以前自分の黒い瞳を奪った女が写っていた。

この2人は、以前自分が雇われていた頃は恋人同士だった。今もそうなのだろうか？ しかし、どうしてそんな大切な写真を破片と共に袋に入れてしまっているのだろう。

その疑問で何となくもやもやした気分のまま、再びビニール袋に目を向ける。先程は気がつかなかったが、ビニール袋にはまだ何か大きな塊が入っているようだった。そつとビニール袋に手を入れて、破片で指を切らないように注意しながらその塊を取り出してみる。それは携帯電話だった。雲八が持っているものより少し分厚く、沢山の傷が入っている携帯電話だ。その裏側には、先程の写真に写っているのと同じ男と女が写った小さなシール状の写真が貼られている。

カエデはその携帯電話を開いて、電源ボタンを押してみた。あまりこういったものの使い方は良く分からなかったが、何度か雲八が操作しているのを見ていたので、見よう見まねだった。あまり期待は

していなかったのだが、電源が点いたようだ。マナーモードに設定してあるのか、音は鳴らない。深い暗闇だった室内に、突然の明るい光が浮かび上がった。

その明るさに驚き、カエデは少しずつ片目を瞑ったり開いたりしながら徐々に目を光に慣らしていった。少しずつ目が慣れてきたはいものの、使い方はやはりさっぱりわからない。勿論カエデは雲八の携帯電話の番号を知らなかった。それどころか、自宅の電話番号すら覚えていない。

これは恐らく役に立たないだろう。そう判断して電源を切ろうとした時、カエデはふとある部分に目を留めた。携帯電話の側面、小さなボタンのようなものがいくつか付いているそこに、不思議な赤黒い色をした何かが付着していたのだ。爪の先で擦ってみたらそれはすぐに取れて、カエデの白い指にはりついた。

（この色は……？）

気のせいかも知れないが、この色は自分が良く知っている色のような気がした。殺されたあの夜、自分の体から大量に出たあの液体の色に非常に良く似ているような気がしたのだ。

嫌な予感がして、思わずカエデはメールメニューを開いていた。受信ボックスを開き、メインフォルダをクリックする。……表示されているほとんどの名前は、“朱音”だった。恐らくこれは、写真やプリクラに写っていたあの女性……もとい、あの男の彼女の名前なのだろう。最後にメールが送られて来ていたのは、今から2週間前だった。それから先、この携帯電話には1通のメールも来ていない。慣れない手つきでボタンを押して、恐る恐るメールの内容を見ている。

『大事な話があるんだけど、メールじゃ話せないの。明日の夜7時頃に公園で会える？』

顔文字も絵文字も全く使われていない、飾り気のない文章。その文章を読んだとき、何故だろう、酷い吐き気が込み上げてきた。ただ、とんでもなくおぞましいものを見てしまったのだと感じた。

もうやめよう、電源を切ろう。そう思っているのに、指先は止まってくれない。いつの間にかカエデは、データフォルダから写真や動画の記録を引っ張り出していた。

フォトフォルダには数年程からの写真が保存されていて、そのほとんどがああ男とその彼女の写真だった。数枚、翼&朱音、などと可愛いロゴが入っている。2人は本当に幸せそうな笑顔を浮かべていて、とても仲が良さそうだった。暫くそんな写真ばかりが続き、つい2週間前に撮られた写真が保存してあるフォルダを見た瞬間、指が止まった。

何だか、開くのが怖かった。開いて平気だろうか、好奇心と恐怖心が入り混じった不思議な感情が体中を駆け巡る。

このフォルダも先程のメールメニューと同じ様に、2週間前以降の記録は全く無い。まるでこの携帯電話だけ2週間前から時が止まっているかのようだ。

それから何度も携帯電話を床に降ろそうかと迷った挙句、カエデは意を決してそのフォルダを開いた。……開いてしまった。

その瞬間、カエデは小さな声で悲鳴をあげて、思わず携帯電話を床に投げ捨てた。床と携帯電話がぶつかって、かしゃりと鈍い音が鳴る。

両手で口を押さえ、震える体を落ち着かせるために肩で何度も大きく息をした。鳥肌が全身を覆っているのを感じながら、恐る恐る再び携帯電話に近づいて画面を覗き込み、耐え切れず目を逸らす。

保存されていたその写真に写っていたのは、変わり果てた、彼の彼女の姿だった。腹から大量の血を流し、両目を見開いて地面に仰向けに転がされている女性。酷く髪型が乱れ服が血で真っ赤に染まっ

てしまっているが、これは間違いなくあの朱音という女の人だ。
いったいどうしてこんな写真が保存されているのだろう。その日撮
られた写真は、すべてが朱音の遺体の写真ばかりだった。

第33話 試写会

呆然と画面に目を落とすカエデの姿が、目の前にある姿鏡に映し出されている。自分のその青白い顔に何となく視線を動かしたその時だった。……鏡に映っている自分の背後に、おぞましい笑みを浮かべた男の姿が浮かび上がったのは。

振り返ることすらできない内に、カエデの髪の毛は強い力で驚掴みにされ、思い切り後ろに引っ張られた。

「きゃああああ！」

大声を上げてみても、その力は一向に緩まない。それどころか更に強くなっている気さえする。カエデの頭は強かに床に叩きつけられた。外側と内側からの激痛で、眩暈がする。頭皮から抜けてしまった数本の髪の毛が自分の頬にはりついた。

「何度教えたら分かるんだ？ ああ？ 大声出すと、今すぐここで殺すぞ……」

男の低い声がカエデにそう囁き、脇腹に容赦のない足蹴りが入る。両足ががくがくと震え、その僅かな振動で鎖が細かく震えて音を立てた。

指輪の嵌められた大きな男の手が、カエデのすぐ脇に転がっている携帯電話を拾い上げた。携帯電話を開いて、先程表示されていたままの画面を見た男は、へえ、と呟いて愉しそうに片眉をあげた。

「見たのか」

その問いに対して、カエデは震えながら首を横に振る。恐怖で喉が

引き攣り、息が出来なくなつた。

「本物の人間の死体だぜ。……うつとりするだろ？」

男は低く笑い声をあげながら、これ見よがしに携帯電話をカエデの目の前に突き出した。

「……よお、お前の中に流れてる偽物の血は、これがモデルなんだぜ？ “本物”を見て、ロボットのお前はどう思ったんだ？ 詳しく聞かせてくれよ」

男はにやにやと笑ってそう言ったが、カエデは何も言わず唇を引き結んでいた。そんなカエデを見て、男は突然顔を輝かせて膝を打った。

「おお、そうだ。そんじゃあ、お前にいいもん見せてやるよ。ちょっと待ってろ」

嬉々とした表情で、男は部屋を出て行く。カエデはただ両目を見開いた状態でそこにおとなしく転がされていた。転がっているしかなかった。

昔あの男に“雇われていた”頃。あの頃も、あの男は何度か自分のところにいいものを見せてやる、と言つてとんでもないものを持ってきた。それは酷く硬い鞭だったり色々なものを瞬時に溶かしてしまふ液体だったり鋭利な刃物だったり……とにかく、とんでもないものだった。

言葉では言い表せないほどの恐怖心。カエデの瞳のふちにはいつの間にか涙が溜まっていた。

数分後、男が部屋に戻ってきた。男が大事そうに抱えているのは、

ビデオカメラのようなものだった。男は鼻歌を歌いながらビデオカメラをテレビに接続し、こちらを振り返って言った。

「“つい最近”、撮ったんだ。お前はどうせ今夜にでも俺らに殺されるんだし、特別に見せてやるよ。それじゃ、ごゆっくり。…… 004号さん」

男は不気味に笑いながら部屋を出て行ってしまった。恐怖で体が動かない。男が居なくなっただのは自分の目で見ていて分かっているのに、まだ体中の筋肉が緊張していた。

ただ1人部屋に取り残された力エデの目の前で、テレビが映像を映し始める。ひっそりと恐怖の試写会は始まってしまった。

第34話 映像

電源は点いている筈なのに、何故かまだ画面は闇に包まれていた。故障しているのだろうか、そう考えたカエデは一瞬だけ肩の力を抜いた。しかし、見つめている画面が大きく揺れた気がして、カエデは再び体を強張らせる。じっと画面を見つめているうちに、微かな衣擦れの音と地面を靴で踏む小さな音が耳に入り、カエデは理解した。

この映像は、酷く暗いところで撮影されたようだ。この部屋と同じくらい暗いところか、もしかしたらここよりもっと暗いところで。画面が進む（よく分からないが、砂利を踏むような音が聞こえるので、恐らく前進しているのだろう）。大きな木や木製のベンチやブランコが闇に溶け込んで、ぼんやり映りこんでいるのがなんとなく分かった。きっとこの映像が撮影されたのは、どこかの公園だろう。少なくとも、屋外だということは確かだ。

やがて、砂利を踏みつける音が消えて画面が揺れるのをやめた。カメラが前を向く。遠くの方に、向かい合って立っている2つの人影が映し出された。そだけ街頭で照らされていて、何とか2人の姿を見分けることが出来る。……男性と、少し小柄な女性のようにだった。何か言い合っているように見えるが、こちらに声は聞こえない。

「死ね！」

突然こちらに聞こえる程大きな男の罵声が飛び、次の瞬間、男性が女性の腹を勢い良く蹴りつけた。

女性が悲鳴をあげて地面に倒れ込む。相当強い力で蹴られたのだろう、腹を抱えてのた打ち回っているようだ。男性はそのまま女性に馬乗りになり、男性の拳が女性の顔を打った。数えることも出来ないくらいに素早く、何発も何発も。

「うるせえんだよ！ 騒ぐと殺すぞ！」

男性の罵声に、女性の悲鳴が呑み込まれる。女性は泣いているようだ。しきりに目元の辺りを指で擦っている。男性は女性が静かになったのを確認するように何度も女性の胸倉を掴んで激しく揺さぶった後、こちらの方に向かって片手をあげた。

画面がそちらに向かって動き出す。カメラを見た血まみれの女性の顔が、懐中電灯で照らされた。画面の左端と右端から体格のいい男が2人飛び出した。女性は今、計4人の人間に囲まれているような図になっているらしかった。

「きゃあ！ 何なのよあんたたち！ ちょっと翼、どういうこと？」

涙声でそう叫んでいる女の顔には、勿論見覚えがあった。

「いや！ やめて翼！ お願いだから……っ」

「うるせーっつってんだろ。黙れよ」

ポケットに手を入れた男性が冷たい声でそう言い放ち、再び女性の腹部を蹴りつける。鈍い音がして、女性は声にならない叫び声をあげた。

「お前らもやつちまえ。こいつはもう要らねえ」

男性はそう言いながらまたしても女性の顔を片足で踏みつけた。泥のついた靴で踏まれた彼女の顔は赤黒く変色し、女性は泣き喚きながら地面に倒れて苦しんでいる。

「いいのかよ？」

カメラを持っている人物が、くぐもった声で尋ねた。声の低さからして、恐らくこの人物も男性なのだろう。目の前にいる男は、ああ、と小さく返事を返した。

「いいぜ。好きなだけ殴るなり蹴るなりしてやれよ」

その言葉を聞いた他の男たちの拳が、女性の顔を殴りつけた。その度に女性は大きく悲鳴をあげ、涙声で叫ぶ。

「おい、いいのかよ翼。彼女さん、死んじゃうぜ？」

「いいつつてんだろ。大体もう彼女じゃねーし」

「そうか。そんじゃ、遠慮なく……」

肉を蹴りつける音。悲鳴。数十分の間、それは絶え間なく続いた。殴られすぎて女性の顔は酷く歪んでしまっている。女性が縋るように男性の足を掴み、血でくぐもった声で叫んだ。

「やだあ、やめて！ 苦しいよ、翼……っ」

男性は足を振るって女性の手を跳ね除けると、背中を片足で踏みながら、は？ と冷たい声を上げる。

「黙れ。俺の名前を気安く呼ぶんじゃねえよ。もう俺はお前の男じゃねえんだろ？ ほら、その惚れた男ってヤツに助けでも求めてみるよ」

「……っ、めん……。翼のことが、嫌いになった、わけじゃないの。だけど……」

「いつからそいつと付き合ってたんだよ。ガキが出来るって事は、相当前からなんだろ？ 正直に答えるよ、そうしないと……」

「し、知り合つたのは、半年くらい前……っ」

「へえ……。半年前つてことは、俺一筋とかほざいてやがった時からつて事だよな？ そんな前からこの俺に二股かけてやがったわけ？」

男性は女性を暫しの間冷たく見下ろしていたが、やがて突然満足したような笑みを浮かべて、ジャケットからサバイバルナイフを取り出した。

「じゃ、そろそろ死ねよ」

「え……っ」

女性の顔から血の気が失われていく。周りの男たちも流石に焦ったような顔をして、男性を止めた。

「お、おい。翼、それはやべえよ。落ち着けつて。……な？」

男性はぎらぎらと目を輝かせて、何故か口許に笑みを浮かべたまま首を傾げる。

「今更何言つてんだよ。どうせこのまま生かしてても、俺らは刑務所行きだぜ？」

その言葉を聞いた女性は、大きく首を横に振って唾を飛ばしながら叫んだ。

「いや！ いやよ、お願い！ やめて、殺さないで！ 言わないから、あたし、誰にも言わないから！ だからお願い、命だけは助けて！」

「心配すんなつて。ちゃんと胎のガキ共々殺してやるから」

「やめて……いや……助けて！ 誰か助けてー！」
「おい、何度も言ってるよな？ ……黙れって」

女性が一際大きな悲鳴をあげたその瞬間、サバイバルナイフが、女性の腹に向かって一直線に振り下ろされた。

第35話 救いの手

カエデは画面から目を逸らしていた。映像はいつの間にか終了したようで、再び画面に目を向けた時にはもう暗闇しか映っていなかった。

暫くの間放心状態だったカエデだが、ようやくハツとして顔をあげた。それと同時に、体が小刻みに震え出す。

逃げなければ。

ここに監禁されてからずっとその思いはあったが、今の映像を見て更にカエデの思いは明確なものとなった。早くここから逃げないと、確実に殺される！

自分は油断していたのだ。心のどこかでは“流石に、すぐ殺されはしないだろう”と甘く考えていた。しかしそれは違う。自分の彼女だった人間まで躊躇いなく殺す人なのだ。機械である自分なんて、ロボットすぐ壊れてしまうだろう。

カエデは自分の足にとりつけられている鎖を外そうと、両手の関節が白くなるほど力を入れてみた。しかし、僅かに指の先が赤くなっただけで鎖はびくともしない。

焦ってはいけない。焦ると冷静な判断ができなくなる。いくらそう考えても、焦る気持ちは膨らむ一方だった。

自分はまたここで殺されるのかも知れない。以前よりもっと苦しく、激しく、辛い方法で……。もう2度と蘇る事のできないように、頭部も破壊されるかも知れない。そうなったら、自分はもう2度とこの世界を生きることができないのだ。

突然、カエデの脳裏に雲八の笑顔が浮かんだ。その笑顔を思い出した途端、不思議と全身の力が抜けていった。

つい最近までは、この世界が、人間が、人間に造られた自分が、許せなかった。大嫌いで憎むべき存在だった。しかし今の自分はどうかろう。たったひとり、彼の笑顔を思い出しただけでこんなにも涙が溢れ苦しくなる。

この世界を愛することができるようになったのは……、楽しい、嬉しいという感情を思い出すことができたのは……、すべてあの人のおかげなのだ。

「雲八様……」

涙を流しながら、カエデはぽつりと雲八の名を呼んでみた。脳裏に浮かぶ雲八が、笑顔でこちらを振り返る。

実際に目の前に広がるのは、深い暗闇と煙草の臭いだけ……。

（私は、もっと生きたい。この世界で、貴方と共に……）

両手で顔を覆い、再び雲八の名を呟こうとしたその時。頭上で、こつんこつん、と何かを叩くような不思議な音がした。

驚いて、思わず顔をあげる。天井のすぐ近くの位置にぽつんと小さな窓があることに、カエデはこの時初めて気づいた。慌てて窓に手を伸ばしてみる。閉じられていた厚いカーテンを引くと陽の光が差し込んできて、一気に室内が明るくなった。

やっと光に目が慣れてきて、恐る恐る片目を開いてみる。と、その窓の向こうには見覚えのある色をした鳥がいた。そう、言うまでも無くその鳥は、カエデが雲八の家で可愛がっていた美しい羽を持つあの鳥だったのだ。

「！」

窓を開けようとしたが、窓は壁に嵌め込まれているつくりのもので、鍵はついていなかった。数分迷った後、カエデは唇を引き結んだ。

鍵が無いのなら、壊すしかないだろう。

そばにあったテーブルの上から分厚い雑誌を掴んだカエデは、それを両手で持ち直して窓に近づいた。きつと大きな音がするだろう。気づかれてしまう可能性は高い。だけど、今思いつく限り、この方法以外に脱出することは不可能だ。

カエデは覚悟を決めた。一度大きく窓から離れ……、両手を勢い良く前に突き出す。1度目。がつん、と音がしたが窓は割れない。2度目。先程より少し力を強めて窓を叩く。まだ割れない。3度目。思い切りちからいっぱい窓に雑誌を叩き付けた。

ぱりん、という乾いた音がして、窓にヒビが入った。覚悟はしていたが予想以上に響いたその音に、カエデは体を強張らせて扉に視線を投げる。

……男が異変に気づいた様子は、無い。

カエデはすぐさま雑誌を床に置いて、割れている部分を両手の親指で押した。指の先が傷付き、血が滲む。それでも尚力を強めて押し込むと、ヒビの入っていた部分だけ綺麗に割れて外へ落ちていった。ほっとした瞬間、鳥がたった今開けた窓の穴へと一直線に突進してきた。器用に穴を通り抜けて、部屋の中へ入ってくる。

鳥はぱたぱたとカエデの周りを飛び回ると、やがて彼女の目の前へおりてきた。首を傾げるような仕草をしながらカエデを見つめる鳥の目は、とても澄んでいて美しい。カエデは、そっと鳥のそばへ屈んだ。

「私を心配して探しにきて下さったんですか？」

鳥は無論何も答えない。しかし、そのつぶらな瞳に自分の顔が映っ

ているのを見た時、カエデは微笑を浮かべていた。

「実は、私は囚われてしまったのです。もう二度と雲八さまの元へ帰る事はできないかもしれません」

心なしか少し悲しげな声で鳴く鳥。カエデはそつと人差し指を伸ばし、鳥の頭を優しく撫でる。

「……でも、私は諦めたくない。だから鳥さん、お願いします……私に協力してください」

カエデは、先程窓を割る時に使った雑誌を拾い上げてページをめくった。

その中から白っぽい１ページを選んで破り、あらかじめ床から拾っておいた鉛筆で文字を書く。

「これを雲八さまに届けて頂けませんか？」

カエデはその紙を四つ折りにして、鳥の目の前に差し出した。鳥は丸い瞳でじつとカエデと紙を見つめている。

やはり無理なのだろうか。カエデがまた泣き出しそうになった、その時。

突然鳥がその紙を口にくわえ、飛び始めたのだ。

「……鳥さん！」

鳥は何度かカエデの頭上を飛び回ると、開け放たれた窓から遙か空の彼方へと消えていった。

カエデは暫くその姿を見送った後、鳥が雲八の元へ辿り着くことを

祈って、先程と同じ様にカーテンを閉めた。

第36話 帰宅

「ただいまー」

帰宅した雲八は自室の前で小さく呟いた。鍵を開けて玄関に入る。部屋の中は真っ暗だった。

（無理もないか……）

もう日付が変わってしまっているのだから。

こんな時間に部屋に戻るのは久しぶりのことだった。今日も真っ直ぐ家に帰るつもりで居たのだが、マンションへ帰る途中モ力含む昔の同級生たちに会い、成り行きで一緒に飲みに行くことになってしまったのだ。連絡を入れておこうかとも考えたのだがあいにく携帯電話の電池が切れていたため、カエデには何も伝えていない。

（俺、最低だな……やっぱり断るべきだった）

カエデのはにかんだ笑顔を思い出す度に胸が痛くなる。

（待ってたかな、カエデ……）

でも、まだ良かった。寝ないで自分を待っていていたりしたら、罪悪感で死にそうになっただろう。電気が消えているということは、きっとカエデは就寝しているはずだ。

「……あれ？」

リビングの電気を点けた雲八は、思わず声を洩らした。食事の時に雲八が居なければ、いつもカエデはリビングのテーブルの上に食事を用意しておいてくれるのだが、今日は何も用意されていなかったのだ。

雲八は首の後ろを掻いて、ふう、と息を吐いた。

（愛想尽かされちゃったのかな？　しょうがない、自分で入れよう）

流石に連絡もよこさない雇い主にはウンザリするだろう。これはきつと、彼女なりの不満の表し方なのだ。

台所に移動して、茶碗を用意して炊飯器のふたを開ける。

「……ん？」

雲八は目を丸くして炊飯器の中を覗き込んだ。……炊飯器の中は空っぽだった。

洗ったままのような状態で放置されている炊飯器。よく見ると、フライパンや鍋なども食器棚の中にきちんとしまわれている。カエデの茶碗などの食器も、食器棚の中にしまわれていた。

「おかしいな……」

いつもカエデは食事を終えて皿を洗った後、自然乾燥させるために流しの傍の入れ物に入れておくはずなのだが。

「……」

なんだか嫌な予感がした。雲八はそつと茶碗を食器棚の中に戻すと、

カエデの部屋へ向かった。

ロボットとはいえ一応高校生設定の女の子の部屋なのだから、雲八はこの部屋には必要最低限入らないようにしようと決めていた。：就寝中となれば、尚更だ。しかし、何故か今はどうしてもカエデの様子を見なければいけない、そんな気がしてならなかった。ノックを試してみた。しかし、返事は無い。

「カエデ、ごめん。……入るよ？」

一応そう断っておいてから、ドアノブを回す。

部屋の中へ入り、布団の方に目をやる。何となく布団が膨らんでいるような気がして、雲八はほっと安堵の息を吐いた。

（なんだ、良かった。いるのか……。まあ、とりあえず家に帰ったことは言っておかなくちゃな）

そう思いながら電気を点けてベッドへ近寄った雲八は絶句した。布団の中には、少し前に雲八がUFOキャッチャーでとってきたキャラクターのぬいぐるみが入っていたのだ。無論、布団が膨らんでいたのはそのせいで、肝心のカエデの姿はどこにも見えない。

「カエデ……？」

布団を引き剥がしてみても、ベッドの下を覗き込んでみても、やはり居ない。

「カエデ！ カエデ！」

もう深夜だというのに、思わず雲八は彼女の名を叫んでいた。

第37話 手紙

部屋の中をくまなく探す。

情けないことだが、カエデが行きそうな場所など思い当たらなかったのだ。

せいぜい行くとしても、家の周りの店や公園……。こんな夜遅くまで、そんなところにいるはずもない。

トイレ、風呂場、玄関、自室、カエデの部屋、

部屋中を見回して、クローゼットを開けて、テーブルの下まで覗き込む。……どこにも居ない。

「どこ行っちゃったんだよ……」

警察に連絡することなんてできない。彼女は人間ではないのだから、まともに取り合ってくれないだろう。

だからと言って、どうやって彼女を見つければいいのだろうか？

雲八はよろめきながら、再び台所へ向かった。

流し台を覗き込んでみたり、食器棚を開いてみたりした。

そんなところにカエデがいるはずは無いと分かっていた。ただ、何か手がかりになるものが欲しかった。

窓を開けると、少し冷たい夜風が室内にふきこんできた。途方に暮れながら、星の出ている夜空をぼんやりと見上げる。

目の前に見えている電線。……そこに、見覚えのある鳥が舞い降りてきた。

「……あ！」

カエデが可愛がっていたあの鳥だ。あんなに珍しい色をしたあの鳥を見間違えるはずが無い。

よく目を凝らしてみると、くちばしに何かを挟んでいるように見える。

雲八は咄嗟に窓から身を乗り出して、鳥の方へと手を伸ばしていた。

その鳥は一度だけ高く高く舞い上がると、窓から伸ばした雲八の手の上へ、くわえていたものを落とした。

慌ててそれを掴む。その様子を確認した鳥は、再び漆黒の空へと消えていってしまった。

鳥の消えていった方を気にしながらも、雲八はその紙を見つめた。

四つ折にされている、白い紙だ。手紙か何かだろうか？

それを開いた雲八は絶句した。そこには、次のようなことが書かれていたのだ。

『雲八さまどうかおたすけください。以前のやといぬしさまにとらわれてしまいました。彼は今夜部屋にお仲間をまねいてわたくしのことを再び再起ふのうに追い込むつもりです。にげだしたいのですが足かせがありにげられません。ここはマンションの9階です。近くにこうえんとゆうびんきょく、それからぎんこうとえきがあります。以前のやといぬしさまのお名前は、西城翼さまです。』

「……………これは……………」

差出人の名前はどこにも書かれていなかったが、たどたどしいその文章を読んだ雲八は、これを書いたのは絶対にカエデだろうと考えた。

「……カエデ、」

カエデの名前を呟いた雲八は、ハツとして立ち上がった。これが本当ならば、カエデが危ない。

第38話 搜索

雲八は慌てて靴を履き、玄関を飛び出した。施錠していないが、そんなことに構っていらなかった。カエデがさらわれたのだ。しかも、以前の雇い主といえばカエデを人間不信にした張本人だ。怒りと辛さと殺意が入り混じったような不思議な感情が雲八の心の中を支配する。息苦しくなつて、鼓動がやけに速くなつたのを感じた。今までこんなに走ったことはない和本気で思つくらい、全身を走ること集中させる。一刻も早くカエデの元へ行かなければ。急ぎすぎて何度も転びそうになりながら階段を駆け下りて、道路に出る。一瞬だけどの方向に進もうかと足を止めたが、すぐに前方に向かつて再び駆け出した。

（公園、郵便局、銀行、駅が近くにあるマンションなんか、近くにあったか……？）

まだ上京してきて間もない雲八は、この辺りの地形すらよく頭に入っていないかった。

（でも、駅や郵便局や銀行が近くにあるマンションってこの辺では好条件だよ……。高級マンションなのか？）

頭ではぐるぐる色々な考えを巡らせながらも、走るスピードは落とさない。こんなに全力で走るのは一体何年ぶりだろうか。小学生の時リレーの選手になった時だって、こんなに力一杯走りはしなかった。

走りながら腕時計に目をやり、雲八は唇を噛み締める。もう時刻は

深夜の1時を回っていた。手紙には、今夜以前の雇い主が仲間を連れてくると書いてあった。もしかすると、もう手遅れかも知れない。

「……つ馬鹿、何、考えてんだ、俺！」

息絶え絶えにそう叫び、雲八は更にスピードをあげて夜の道路を駆けた。そんなことを考えている時間が勿体無い。諦めるわけにはいかないのだ。

毎日大学へ向かう道で通るスーパー、自分は入ったことは無いが、モ力たちがよく行くと話していたお洒落なカフェ。どちらも、当たり前だがシャッターが閉まり店内は真っ暗だった。昼間は賑わっているなんてとても信じられない程に静まり返ったその場所は、異様な不気味さを醸し出している。

カフェの傍にある小さな小道を通ろうとした雲八は、足元に何かが落ちていることに気がついた。

「？」

その物体が妙に気になった雲八は思わず足を止めてしゃがみ込み、目を凝らしながらそれを拾い上げた。それは先程通ったスーパーの買い物袋だった。大学へ行く途中で買い物をする事があるので、このマークには見覚えがある。

何気なく袋をひっくり返してみても、底に穴が開いていることを知った雲八は、ようやく周りに落ちているものに気が付いた。林檎やジャガイモらしきものの残骸が散乱している。生ゴミというよりは、何者かに食い散らかされたような感じだった。きっと野良犬や野良猫、或いはカラスがこれを漁って食べたのだろう。

しゃがみ込んだ雲八の足元には卵のパックが落ちていた。殻が中に入ったままになっていたが、そのほとんどは割れてしまっている。雲八は卵のパックを持ち上げて、地面に流れている乾ききった卵の

痕を目で辿った。その向こうに、四角形の塊。それを暫くじつと見つめた雲八は、はっとした。

（間違いない、これ、カエデの……）

そう、それはカエデの財布だったのだ。雲八がカエデに買ったものだから、見間違えるはずはない。

開いて中身を確認し、中に入っている札や小銭を調べる。普段と変わりなくお金は入っていた。手つかずのままここに放置されているということとは、引ったくりに盗られたわけではない。

つまり、この辺りでカエデの身に何か起こったのだ。カエデはこの近くにいるのかも知れない。雲八は一度その財布を両手で握り締め、その後、そっとポケットにしまって、再び全速力で走り出した。

第39話 目的地

その後雑木林を駆け抜け、雲八はまた足を止めた。小さな交番を見つけたのだ。このまま適当に探し回るより、ここで道を尋ねた方が賢い選択だろう。

（確か大抵の交番は24時間体制だったと思うけど……）

走り回ったせいで足がやけに重い。夜の冷たい空気を吸い込んだら、少し咳き込んでしまった。咳が治まるのを待ってから交番に近づいてみる。明かりが灯っているので、誰かいるのだろう。

「あの……、すみません」

「……あ。はい？」

室内で欠伸を噛み殺していた白髪混じりの警官が、雲八の声に気づいて慌てて立ち上がった。

「どうかしたのかい？」

雲八は足を引きずるようにしながら警官に近づき、掠れた声でこう尋ねた。

「この近くに、駅、郵便局、公園、銀行が近くにあるマンションって……ありますかね？」

「駅、郵便局、公園、銀行が近くにあるマンション？」

警官は雲八の台詞を繰り返してから、うーん、と顎に手を掛けた。

「あるにはあるけど、確かあそこはもう入居者が全員決まっちゃってるって話だからやめた方がいいと思うけどねえ。高級マンションだから家賃も高いよ？」

警官はどうやら、雲八が住むマンションを探しに来た人間だと思っ
たらしい。流石に雲八は苛立ちを隠せず、目の前にあった机を両手
で強く叩いて叫んだ。

「いいから教えてください！ お願いですから、なるべく分かり易
く簡潔に！」

語気を強めて警官ににじり寄ると、警官は少し首をすくめるような
恰好をしながら雲八の後ろの方向を指差した。

「こ、この道を通つ直ぐ進んだところにあるマンションだと思つよ。
それはそうと、君、いい大人なんだからこんな夜中にそんな大声出
すものじゃない。マナーというものをいつでも考えて行動するのが
大人っていうもので……」

「……どうも」

雲八は説教を始めた警官に小さく頭を下げると、足早に交番を出た。
目の前に伸びる歩道を、一心不乱に走る。流石に東京のと真ん中な
のでこんな夜中でも車通りは多く、所々に明かりがついていた。そ
のお陰で唯一の目印である公園、銀行、郵便局、駅を見逃さずに済
んだ。300メートル程前方に大きなマンションが見える。

（きつとあのマンションだな。表札を見て西城ってやつの部屋を捜
せば、後は簡単だ）

疲労で走ることに限界を感じていたが、マンションを確認した瞬間
自然に雲八の足は更にスピードをあげて走り出した。

苦しくて今にも倒れてしまいそうな程心臓が脈打っているのを感じ
るが、ぐんぐんスピードはあがっていく。最高速で駆ける雲八の瞳
は、しっかりとマンションを見据えていた。……マンションまで、
あと100メートル。

第40話 足止め

その頃、カエデは依然暗いままの部屋の隅でじつと丸まっていた。少し離れたところに翼含む数人の男たちが座り込んで、煙草をふかしながら雑談している。

「それにしても翼、良くあいつ見つけ出したなあ」

男のひとりが部屋の隅に視線を向け、震えているカエデを見て笑い声をあげた。翼はふふんと鼻を鳴らして煙草の煙を吐き出し、だろ？ と得意気に胸を張った。

「たまたま暇だったからカフェで時間潰してたら、外から店内覗き込んでるこいつが目に入ってたさあ。雑木林に追い込んでお持ち帰りしたわけよ。これってやっぱ運命ってやつ？」

「へえ。でも、またこいつの顔見れるとは思わなかったよな」

「だよな。もう壊れちまったのかと思ってたけど、案外アンドロイドって丈夫にできてんだな」

楽しそうな笑い声をあげる男たちを気持ち悪そうに見つめながら、カエデは唇を噛んだ。

……あの手紙は無事に雲八の元へ届いただろうか？

今の自分には待つことしか出来ない。迷惑ばかりかけている自分に心底嫌気が差した。

「ところで、ハジメはまだこねえのか？」

男のひとりが不愉快そうな声をあげて大袈裟に溜息を吐いた。その名前を聞いた他のメンバーも、そうだそうだと口々に言い合う。ハジメ、という名前にはカエデにも聞き覚えがあった。昔ここで“殺された”時、一番楽しそうに解体作業に参加していた男の名だ。

「あいつのせいで俺らはお預けくらってんのによー」
「もうとつくに集合時間過ぎてんじゃないか」

ぶちぶちと文句を言い始める男たち。翼はもう一度煙草の煙を吐き出してから、立ち上がってこう言った。

「まあ、お前らそう慌てんなって。もう1回連絡入れてみる」

数分後、携帯を片手に部屋へ戻ってきた翼の顔は明らかに不機嫌そうだった。

「どうだった？ 翼」

「……留守電設定になってた」

「留守電？」

「ああ。今日から彼女と旅行行ってくて」

「はあ？」

あちこちから不満の声があがる。この場には居ない、ハジメという男に対しての暴言が飛び交った。

カエデは丸まったまま全身を強く抱きしめていた。今にも発狂しそうなほどの恐怖心がカエデの精神を押し潰していく。

第41話 恐怖

数分後、ようやく怒りが治まったらしい男たちは、とうとう立ち上がってカエデの方へ視線を向けた。

「それじゃ、始めるか」

「楽しみだな」

「今回は何で殺る？」

カエデはじつとして黙っていた。あまりの恐怖でおかしくなってしまうのか、体はもう震えていなかった。

男たちが不愉快な笑みを向けながら、ゆつくりとカエデの方に近づいてくる。カエデは更に体を小さく丸めた。

さて、と翼がカエデのすぐ側で腕組みをした。何かを考え込むように唸った後、口を開く。

「電動のこぎりこないだのやつは、深夜だから今回は使えねえな。マンションだし、隣人から苦情がきても困る」

「それじゃ、どうするんだ？」

「違うもの使ってバラバラにするか。台所には包丁があるし、その引き出しにハサミとカッターがあつたはずだ」

翼の指示を聞いて、1人の男がそれらの凶器を取りに向かつていった。カエデの脳裏に、鋭利な刃物のシルエットが浮かんでは消えていく。

「他には？ 流石にバラバラにするだけじゃ面白くないだろ」

「そうだな……それじゃあ熱湯でもかけるか」

「オツケー。おい、ユウヤ！ 湯、沸かしてくれ」
「了解」

先程台所へ包丁を取りに向かった男が、数本の包丁を他の男に手渡しながら返事を返した。

「湯が沸いたら作戦決行な」
「おう」

カエデの体が再び震えだした。全身の血が冷えて固まっていく音がある。カエデは無意識のうちに両手を強く胸の前で握り合わせていた。

お湯が沸いたとき、それが自分が破壊されるときなのだ。

翼がどこからか黒い布と猿轡を持ってきた。それを目にしたカエデの両目が、大きく見開かれる。これが何に使われるものなのか、自分には分かっているのだ。

「いや！ いやああああ！」
「……うるせえ。ちよつと黙れ」

頬を力一杯拳で殴られた。歯に当たった口の中の皮膚が切れ、唇の端から血が流れていく。

黒い布はあつという間にカエデのオッドアイを覆い隠した。視界が暗い闇に支配される、言葉にならない恐怖。カエデは猿轡が口に嵌められた時、このまま気絶してしまえることができたなら、と強く思った。

第42話 真夜中の訪問者

「湯、沸いたぞー」

台所の方で男の声がした。その言葉を聞いた瞬間、カエデは一瞬心臓が止まったかと思った。自分が再び殺される時が、遂に来たのだ。

「それじゃ、殺るか」

「おう！」

カエデは必死に鎖で拘束された手足をばたつかせて叫び声をあげた。口を封じられているせいで、くぐもった声しか出てこない。

会話とこちらに近づいてくる足音、そして空気を伝わる微かな熱で、熱湯の入ったヤカンが確実に自分の方へ運ばれていることを感じる。大粒の涙が両目から溢れ出したが、涙は視界を遮っている黒い布に吸い込まれて染みこんでいった。

流れた涙は視界を遮っている黒い布に吸い込まれていった。

（いや、いや……！　お願い、助けて……誰か！）

奇跡というものは起こるものではなく起こすものだ、と誰かが言っていた。だがこんな状況下にいる自分に、奇跡が起こせるはずがない。

「頭からいくか？」

「ああ、それがいいな。それじゃ、一気にいこーぜ」

ヤカンが自分の真上に持ち上げられたことを肌で感じたカエデは、

反射的に両目を固く閉じた。

（雲八さま！）

せめて、いちどだけでもいい。最後にあなたの笑顔を見たかった。

全てを諦めて全身から力を抜いたカエデに熱湯の入ったヤカンが傾けられた……まさにその瞬間だった。
インターホンが鳴ったのだ。

「……あ？」

低い声を上げて誰かが立ち上がる気配。今の声は、きっと翼だろう。

「誰だよ、こんな夜中に」

「ハジメじゃねーの？」

「……さあな。酔っ払いかもしれねーし……」

男たちが小声で相談している間に、再びインターホンが鳴った。
恐ろしい程静まり返る部屋。誰かが唾を飲む音が聞こえた。

「おい、見てきたほうがいいんじゃない？」

誰かが呟くと同時に、またインターホンが鳴る。そうだな、と翼が小さな声で答えた。

「じゃあ、ちよつと見てくる。中断しとけよ」

「わかってるって」

「酔っ払いだったら承知しねえからな」

ヤカンはカエデの太ももの隣へ下ろされたらしい。熱い空気が太ももに伝わり、カエデは小さく体を跳ねさせる。

しかし、ほんの一瞬だとしても恐怖から救われたのだ。

嬉しいような気もする。が、折角覚悟を決めていたのにそれを台無しにされて若干悔しいような気分にもなった。

第43話 救助

誰かの悲鳴が、カエデの鼓膜を震わせた。ハッとしてカエデは体を固くする。今の声は、……翼のものだ。

「お、おい、翼！ どうした？」

「……う、うわっ！」

自分が殴られていた時の様な鈍い音が聞こえて、他の男たちの悲鳴が次々にあがった。何かが床に倒れる音が聞こえ、男たちの怒り狂う声がそれに重なる。

男たちは何者かに向かって酷い暴言を吐き散らしているが、苦しげなその声音から優位にたっているわけではないことは安易に想像できた。目隠しをされているせいで、何が起きているのか全く理解できない。

不安と恐怖で微動だにしないカエデの頭に、何者かの片手が載せられた。

「！」

驚いてくぐもった声をあげ、必死に体を振るカエデ。その耳に、酷く懐かしい声が届いた。

「カエデ、遅くなってごめん。場所探しに手間取っちゃって」

カエデは自分の耳を疑った。聞き間違いでないのなら、幻でないのなら、この声は。

（雲八さま……？）

はたと動きを止めるカエデの耳元で、雲八は優しくこう囁く。

「ちょっと待って、今解くから」

その言葉通り、すぐに大きな手が黒い布と猿轡を取り去ってくれた。視界が明るくなると同時に、呼吸が楽になる。

目の前には、一番会いたいと願っていた人の姿。幻ではない。本物だ。

「雲八様……っあ、ありがとうございます……」

余りの嬉しさで語尾が震え、途端に両目から涙が溢れ出した。折角見ることの出来た彼の顔が、涙でぼやけていく。

「間に合って良かった」

雲八はただそう言ってカエデに微笑みかけた。二度と見ることはできないのだろうつと思っていたその笑顔を見て、カエデは更に目頭が熱くなるのを感じた。

第44話 交換条件

「帰ろう」

優しい声だった。

カエデは泣きながら必死に頷く。言葉が出てこなかった。

カエデの手をとった雲八は、その足元に目を向け、鎖の存在に気づいた。

「これは鍵が無いと無理っばいな。……カエデ、鍵は誰が持ってる？」

「……恐らく、翼さま、だと思います」

しゃくりあげながらそう答えると、雲八は小さく頷いて立ち上がった。

「雲八さま」

不安げな声をあげるカエデ。すると彼は振り向いて、先程よりもっと優しく微笑んだ。

「ちょっと待つて。鍵貰うから」

そう言うが早いか、雲八はすぐそばに倒れていた男を抱えあげた。男はぐったりしていて、いとも簡単に拘束された。気を失っているらしい。

そして雲八は、床に散乱している包丁やカッターナイフの中から細いナイフを選んで拾い上げ、抱えている男の喉元に突きつけた。

「翼って、どの人？」

雲八は向こうを向いているが、自分に尋ねたのだろうと理解した力エデはすぐさま口を開いた。

「ええと、……先程、玄関に向かわれた方です」

「ああ、あの人が。そんなに強く殴っては無いから、多分気絶してはいないはずだけど……」

雲八が言い終わるよりも早く、玄関の方から床を這うようにして、翼がやって来た。口の端から血を流し、目元が青く腫れ上がっている。

翼は雲八を睨みつけながら立ち上がった。カエデはその瞳に怯え、思わず目を逸らした。

「よお……お前、何者だ？」

翼はにやりと口元を歪めてそう尋ねた。その直後に、壁に向かって血の混じった唾を吐く。

「もしかしてそいつの新しい雇い主か？」

「……ええ。まあ」

「ほお、そうか。お迎えとはわざわざご苦労なこつたな」

挑発するような口振りに、雲八は何も言わなかった。ただ黙って、冷たい目で翼を見据えている。

「お前、随分強いな。どこの族の奴だ？」

「族には入ってません。普通の学生です。中学と高校で少々空手を

やってみましたけど、それ以外は何も」

カエデは息をするのも忘れて雲八の横顔を見つめていた。よく知っているはずの雲八の顔が、全然知らない人の顔に見える。口調も、声音も、自分の知っているものとはかけ離れている。よそよそしくて、冷たい。同じ人間なのに、ここまで違う素振りが出来るものなのだろうか。

「それはそうと、翼さんですよ。この鎖外す鍵、渡して貰えますか」

翼は一瞬だけカエデの足元に向けた視線を、すぐに雲八の方に戻した。

「嫌だと言ったら？」

にこりともせず、そう尋ねた翼とは対照的に、雲八は突然満面の笑みを浮かべた。

「この人を殺します」

抱えた男の首にナイフを当てる雲八の目は、本気だった。

第45話 交渉成立

言葉を失う翼とカエデ。雲八は男の首に少しナイフを食い込ませた。

「俺、気が長い方では無いんで、早く渡してください」

翼は乾いた唇を舐めて、ふん、と鼻を鳴らす。

「お前、正気か？ そいつは人間だぞ。人を殺したとなればお前は犯罪者だ」

「……ええ、分かってますよ」

「俺たちはロボットを壊そうとしただけだ。つまり法には引っかかりねえ。確実にお前の方が不利だろうが！」

「……。ロボットを壊そうとしただけ、か」

雲八が先程よりも少し低い声でそう呟いて、片眉を吊り上げた。手に持ったナイフを、抱えた男の頬に掠める。男の頬が少し切れて血が滲んだ。

「俺はカエデのことをロボットだなんて思っていない」

雲八はそう言って再び男の喉へ、垂直にナイフを突きつけた。

「本当は俺、今すぐにでも君たち全員を殺してやりたいくらい腹が立ってるんだ。でも、鍵を渡せばみんな助けてやるんだよ？ それの何が不満なわけ」

力の差はもう分かってるだろうし、と雲八は翼を睨みつける。目元

を腫れあがらせたままの翼は、う、と呻いてポケットに手を入れた。

「わ、……わかったっつーの！ ……ほら、投げるぜ」

がしゃりという音と共に、鍵が雲八の足元に投げつけられる。雲八はその鍵を拾い上げ、カエデの鎖を外した。

「じゃあ、この人も解放します」

雲八は男の首から手を離して床に転がし、ナイフをその隣に置いた。

「カエデ。行こう」

「は……はい……」

雲八と手を繋ぎ、カエデはようやく安心して微笑んだ。
やっと帰れる、そう考えたらとても幸せな気分だった。

第46話 策略

2人で玄関へ向かおうと足を踏み出したその時。気絶していたはずの男が、突如顔をあげた。驚いて一瞬怯んだ雲八の足元に、熱湯の入ったヤカンが倒される。

「うわ！」

「きゃあ！」

ヤカンが倒れた拍子に、熱湯が床の上に流れ出した。熱湯から逃れようと慌てて後ろへ飛び退いた雲八は、背中に強い衝撃を感じた。

「雲……………さま……………！」

カエデの叫び声が、どこか遠くの方から聞こえたような気がした。脳が揺らぎ、吐き気が込み上げる。その場に膝をついた雲八に、倒れていた男が飛び掛った。

（しまった！）

そこでようやく、雲八は気づいた。

気絶していると思っていたあの男は、気絶なんてしていなかったのだ。すべて自分を捕らえる為の罠……………。

（やられた……………）

男に馬乗りになられた雲八は、逃げることは不可能だと悟った。

「カエデ！ 来るな、逃げるんだ！」
「で、でも、でも……」

瞳に涙を浮かべておろおろするカエデに、雲八は声を振り絞って叫ぶ。

「いいから早く！」

カエデは更に迷った後、意を決して玄関に向かって駆け出した。

「逃がすか！」

襲い掛かってきた翼を無我夢中で突き飛ばして、扉を押し開け外へ転がり出る。

「待て、この野郎！」

逆上した翼が、怒りを露にした顔で追いかけてきた。カエデは、何を思ったか下に続く階段を下りようとはせず、上へ続く階段を駆け上がった。

「はっ！ やっぱロボットってのは能無しだな。どこに行くつもりだよ、ああ？」

翼は笑いながら更にスピードをあげた。

（この先は行き止まりだ。……絶対捕まえられる！）

数分後、予想通り行き止まりの壁にたどり着いた。カエデはその壁に手について振り返ると、強く翼を睨みつけた。

「……馬鹿なやつだな。普通上じゃなくて下に逃げんだろ」

つかまえた、と翼の手がカエデの腕を強く掴む。人工的に造られた彼女の手が、みしみしと音を立てた。

翼はそのままカエデの髪の毛を掴むと、すぐさま口を塞ごうと片手を伸ばしてきた。そのタイミングを見計らって片足で翼を蹴り飛ばし、カエデは声を限りに叫んだ。

「いやああああ！ 誰か、誰か助けてください！」

翼の顔が一瞬にして蒼ざめる。ここはマンションで、しかも時刻は真夜中。そんな時に女性の悲鳴が聞こえたという事は、言うまでも無く異常事態だ。

「このっ……黙れ！」

慌てて翼はカエデの腹部を何度も蹴りつけたが遅かった。叫び声を聞きつけたあちこちの部屋に、電気がついたのだ。

マンション中の住民たちが、扉を開けて何事かと顔を覗かせる。

「どうした？」

目の前の部屋から出てきた男性に、カエデは蒼ざめた顔で叫んだ。

「こ、この人に、乱暴されそうになったんです！」

腹部を蹴られたせいで服には泥が付き、部屋に拘束されていた時に殴られたため口の端は切れて血が出ている。あちこちに怪我をしているカエデの言葉は酷く真実味を帯びていた。

「な、何だつて？ 大丈夫か！」

カエデの言葉を聞いた他の部屋の人間たちも、顔を見合わせて何か囁きあっている。翼は突然のアクシデントに、カエデの髪の毛を掴んだまま固まっていた。

「あ！ あんた、9階の人じゃないか？ 俺、何回か見たことあるぞ！」

誰かが翼を指差してそう言った。それを聞き、あちこちからざわめきが起こった。

「ち、違いよ！ コイツはロボットだから……その、」

翼は慌ててカエデの髪の毛から手を放し、弁解しようと口を開いた。しかし、友達とロボットを破壊して遊ぼうと思っていました、などと言えるはずも無く、言葉に詰まる。

部屋から出てきた住民たちに囲まれて、翼の姿はあつという間に見えなくなってしまった。カエデはその騒ぎと人波に紛れて後ずさりをし、誰もこちらを見ていないことを確認して、その場から逃げ出した。

第47話 怪我

階段を下りたカエデは、驚いた。翼の部屋がある階にまでカエデの悲鳴は届いていたらしく、通路が沢山の人で埋め尽くされていたのだ。

その中に、翼の友人の姿も見える。……雲八の姿は、どこにもない。まだ室内に拘束されているのだろうか。

カエデは唇を引き結び、ゆつくりと人の波の中へ紛れ込んでいった。なるべく背の高い人の後ろを選び、隠れながら翼の部屋の前へ辿り着く。翼の友人たちは人波を掻き分けながら上の階への階段を駆け上がっていた。きつと今、室内はもぬけの殻だろう。

部屋の扉を開けて、侵入して鍵を掛ける。室内に足を踏み入れたカエデは、思わず顔を顰めた。……鉄臭い臭いがする。血の臭いだった。

一体どうしてこんなに血の臭いがするのだろう。嫌な予感がした。

「雲八さま……？」

恐る恐る、暗い室内に向かって声を絞り出す。返答は無い。

「……」

カエデは壁を弄って、電気スイッチを入れた。室内が一瞬にして明るくなる。

すぐ目の前に、両腕を後ろ手に縛られている雲八が倒れ込んでいた。

（良かった……）

安堵して思わず泣きそうになりながら、ぐっと涙腺を閉めて雲八に駆け寄る。

「雲八さま」

雲八は返事をしない。

「雲八さま……？」

カエデはうつ伏せに倒れている雲八の体を、そっと仰向けにした。

「！」

その瞬間、カエデは両目を見開き、両手で口を覆った。

「雲八さま！……雲八さま！」

雲八の頬は、どうやら殴られたらしく赤く腫れあがっていたのだ。口の端と鼻、薄く開いた唇の間から血が出ている。更に、雲八を揺り起こそうとその肩に触れたカエデの手に、何かどろりとしたものが付着した。

「いやあああ！」

雲八の肩には、何か鋭利な刃物で傷をつけられたような傷ができていた。相当深く切られたのだろっ、そこから止め処なく血が溢れ出している。

カエデは数秒間、そのままの状態で固まっていた。両手で顔を覆い、泣きながら雲八の姿を見つめる。

（は、はやく、手当てしないと……）

体が震えた。翼に拘束されていたときよりも強い恐怖心が、カエデを支配する。早く手当てしないと、もしかしたら雲八が死んでしまいかも知れない。

死ぬということは、二度と笑わなくなることだ。喋らなくなることだ。この世からいなくなることだ。この世からいなくなることとは、二度と会えなくなることだ。

カエデは泣きながら、細い腕で懸命に雲八を抱き上げた。気絶して力を失っている雲八の体はまるで鉛のように重かったが、カエデは必死に足を踏ん張って、一步一步玄関へ向かって歩き出した。

早く、雲八さまを助けなければ。

ただひたすらその思いがカエデの体を突き動かす。カエデは雲八を引きずるようにしながら部屋を出た。

先程の騒ぎは更に広まっているらしく、この階の住人はみんな上の階へ移動してしまっていて酷く静かだった。お陰で楽に雲八を運び出すことに成功したものの、独りだということが物凄く不安で仕方なかった。

ひっそりと静まり返る暗闇に吸い込まれるように、少しずつ足を踏み出しながらマンションを離れる。

心細さで瞳から涙が零れた。涙は頬を伝って地面へ流れ落ちていった。

第48話 東山博士

ずるずる、ずるずる。夜の道路に、カエデが雲八を引きずりながら歩く音だけが聞こえる。とは言っても、今その音を聞いているのはカエデだけで、人影は全く無い。

（これからどうすればいいんだろう）

病院に行くべきだろうか、とカエデは足を止めた。しかし病院がどこにあるのか、カエデは知らないのだ。

（こんな真夜中だけど、ビョウインはまだ開いているのかしら？それともスーパーやコンビニのように、夜になったら閉まってしまふのかしら？）

もしかしたら、救急車と呼ばれるあの車を呼ばなければ病院に入ってもらえないのかも知れない。いつも見ているテレビドラマでは、大体の患者がああ白い車に乗せられて病院へ搬送される。

（救急車を呼ぶにはどうしたらいいの？……そうだ、きっと電話があるわ。電話をかければいいんだ）

電話はどこにあるのだろう。いや、仮に電話が見つかったとしても、どこへ電話をかければ救急車を呼ぶことができる？

カエデは唇を噛んだ。泣くのを我慢しようと力んでみるが、涙はお構い無しに頬を流れていく。

どれくらい泣き続けただろう。

ふと、前方から足音が聞こえた気がした。その足音はゆっくりとこちらへ近づいてくる。

カエデはのろろと顔をあげ、音のしたほうに視線を向けた。

「……？　おい、アンタ……」

戸惑ったようなその声に、カエデは首を傾げた。聞いたことのあるような声だった。

暗くて、相手の顔が見えない。必死に目を凝らし、数秒後　　：

…カエデは、驚きのあまり両目を大きく見開いた。

「東山博士？」

その人は、カエデを造った大野博士の元弟子である東山博士だった。

「どうして、こんなところに……？」

気の抜けたようなカエデの問いに、東山は慌てて答える。

「俺の研究所がすぐ近くにあるんだ。……いや、それより。それ、何背負ってたんだ？」

カエデの背中を指差す指が微かに震えていた。聞かずとも、分かっているのだろう。

「……私の雇い主である、青空雲八さまです」

「雇い主……？　お前さんを虐待してた奴か？」

「違います。私が危害を加えられていたのは、以前の雇い主様です。この方はとても優しくて勇敢な方です。……私を、助けに来てくれ

た……」

全て言い終わるより先に、涙が頬を濡らしていた。再び泣き出したカエデに驚いたのか、東山はばつが悪そうに目を伏せた。

「その、なんだ……今の話じゃよく分からんから、詳しく聞かせてくれ。俺の研究所はすぐそこだ」

「はい……。でも、」

「でも？」

「キュウキュウシヤを呼ばないといけないんです」

「……なんで？」

「雲八さま、大怪我をされているんです」

「……。何だつて……？」

東山は怪訝な顔をして雲八の顔を覗きこんだ。痛々しく腫れ上がったその顔とカエデの衣服に付いている血痕を見て、全てを悟ったように顔を顰める。

「……分かった、手当てしてやる。ついて来い」

第49話 会話

「……」

目を覚ますと、見知らぬ部屋に寝かされていた。雲八は天井を見つめながらぼんやりと記憶を辿る。

（そうだ、俺……カエデを助けに行つて、逆に捕まって……。捕まった、つてことは、ここはあの男の部屋か？ う、体中が痛い）

体の痛み顔に顔を顰めたその瞬間、脳裏にカエデの笑顔が浮かんた。そうだ、カエデはどうなったのだろう。

「カエデ！」

布団から跳ね起きた瞬間、肩と顔に痛みが走った。思わず呻き声を上げて再び仰向けに布団へ沈み込む。唇を噛んでみたが、痛みは引かない。少しだけ顔を動かして肩に視線を向けると、そこには白い包帯が巻いてあり、少し血が滲んでいた。

もしここがあの男の部屋なら、こんな風に手当することなどありえないだろう。何故ならばあの男は、間違いなく自分も殺すつもりだっただろうから。

（つてことは、ここはあの男の部屋じゃないのか？ ……それなら、ここはどこなんだ）

不安で無意識のうちに呼吸を止めてしまっていたらしく、息苦しさ

を感じて大きく息を吐き出す。

するとその瞬間肩にじわりと血が滲んだ感覚を感じ、雲八は再び息を止めた。呼吸をする度に血液が肩から滲み出てくる感じがして、酷く気持ち悪い。結構な痛みもあるが、どちらかと言えばその気持ち悪さの方が嫌だった。

痛みに顔を歪めて目を瞑っていると、部屋の右側にあった扉が開いた。ハッとして目を開いた雲八の目の前に現れたのは、見覚えのない男性。

「あ……」

驚きのあまり思わず声を漏らすと、男性は雲八の顔を一瞥してからひとつ瞬きをした。

「……目が覚めたか。調子はどうだ？」

「え、あ、あの……」

色々な疑問がぐるぐると頭を巡る。でも、何故か言葉に出すことはできなかった。その代わりにまた肩から血が溢れてくる嫌な感覚がして、反射的に顔を歪めてしまう。

「肩、痛むのか」

「……はい、少しだけ」

「そうか。じゃあ包帯巻き直しとくか？ 自分で巻けるよな」

言いながら男性はテーブルの上に置いてあった包帯を手渡してきた。今まで気が付かなかったが、銀色のテーブルの上には何やら医療器具のようなものが散乱している。

「……あなたが助けてくださったんですか？　ありがとうございます。」

「あー、んなこといいよ別に。それより、俺は人間の医者じゃないから、後で病院にでも行つてちゃんと手当てしてもらえよ。」

「え。人間の医者じゃないって……。もしかして、獣医さんですか？」

テーブルにのっているのはどう見ても医療器具だと思うのだが……。雲八は銀色のテーブルを見つめた後に、もう1度男性の方に顔を向けた。

「いや、獣医じゃない。俺の専門は機械だ。」

「機械……？」

「ああ。ロボットやアンドロイドの修理を仕事にしてるんだ。」

「アンドロイド……。あつ！」

思い出した、と雲八は顔を蒼ざめる。カエデはどこにいるのだろう。まさか、まだ捕らわれたまま？

「あの！　カエデは……。カエデを知道吗？」

「カエデ？」

「16歳くらいの女の子なんですけど……。」

「……ああ、もしかして004号の事か？　軽く脳の線が切れて液漏れしてるみたいだったから、修理中だ。恐らくそろそろ目が覚める頃だろう。」

「どの部屋にいるんですか？」

「その扉のすぐ向こうだ。」

男性はそう答えて啜えた煙草に火をつけた。煙草の煙を吐き出しながら、立ち上がるうとした雲八に目を向ける。

「ロボットならまだしも、人間の治療は専門外だから出血多量で危険な状態になっても助けられない。……俺の言ってることが理解できたのなら無闇に起き上がるな。004号には目が覚めたらこの部屋に来るように伝えてある」

その淡々とした口調に、雲八はハツとして頷いた。

「……は、はい。すみません……」

大人しく再びベッドに横になったのと、目の前の扉が開いたのはほぼ同時だった。

「雲八さま！」

「……カエデ！」

首や頬に沢山の管を通したままのカエデが、泣きそうな顔をして立っていた。カエデはそのままこちらに向かって駆けて来た。体を起こした雲八の首に手を回し、強く抱き締める。

「カ、カエデ……」

「良かった……ご無事で……。……私のせいで、雲八さまが……、ごめんなさい、……本当にごめんなさい……」

「だ、大丈夫。大丈夫だから落ち着いて、カエデ」

少し顔を赤らめながら、雲八は慌てたようにカエデの頭を撫でた。こほん、と咳払いをひとつして、東山がカエデたちの側へ数歩近寄る。

「……お取り込み中のところ悪い、004号。こちらに来る時には

管を外せと言っておいだしたんだが」

「え……、あつ！ 申し訳御座いません。すっかりしていました……
…今すぐ外して参ります」

雲八から手を離し、カエデはいそいそと扉の向こうへ消えて行った。

「さて」

東山はちらりと雲八に目を向けた。

「大丈夫か？ まだ顔が赤いようだが」
「！」

雲八は片手ではたばたと顔を扇ぎながら、大丈夫ですと呟いて視線を泳がせる。

「こういうの、慣れてないもので……」
「そうか」

愉快そうに東山が口元を歪めるのを見て、雲八は首をぶるぶると横に振った。

「へ、平気です。なんていうか、びつくりしただけというか、その……とにかく平気ですから！」

「わかってるよ。別に何も言っていないだろ」

「それじゃあそのニヤニヤ笑いをやめてください！」

「笑い顔なのは元からだ」

「さっきまでそんな笑み浮かべてなかったでしょ！」

第50話 罪人

数分後、カエデが戻ってきた。

「異常は無いか？ 004号」

東山の問いかけを受けて、カエデは小さく頷く。

「はい。異常ありません」

「そうか」

「ありがとうございます、東山博士」

「ああ」

東山はそう言つて頷くと、雲八に顔を向けた。急に緊張してしまつた雲八は、思わず背筋をぴんと伸ばした。

「青空雲八くん、だったかな。大体の事情は004号から聞いた。大変だったな」

「は、はい……」

「俺の名は東山。お前さんが004号を購入した店の店主、大野博士の元弟子だ」

「元、ですか？」

「ああ。俺は自分に才能が無いことを悟つて、大野博士の研究所を無断で飛び出したんだ。それからこの研究所を立ち上げ、ロボット修理の仕事をしている」

中途半端な知識だけを持つて、な。と言つた東山の声は小さく、消え入りそうだった。きつとこの人は今まで辛い思いを沢山してきたのだらう。それを悟つた雲八はもう、それ以上東山のことにについて

は聞かなかった。

「……そうだ、そういえばついさっきラジオで流れてきたんだがな、お前たちを監禁していた翼とかいう男、指名手配犯になったらしいぞ」

「えっ」

雲八とカエデは同時に叫び、顔を見合わせた。

「奴の仲間の1人がマンションの住人に質問攻めにされて、全てを洗いざらい喋っちまったらしい。それを知った翼と他の仲間たちはいつの間にか姿を消していて、警察が行方を追っているんだとさ。調べによれば奴等、お前さんたち以外の人殺しにも関わっているらしいじゃねえか。そっちの件は立派な犯罪だからな。おまけに今回の傷害事件もあるし、捕まれば有罪は間違いない」

これで二度と、お前さんたちの前には姿を現せないだろうなと言って東山は煙草に火をつけた。

「……翼さまたちが殺害した方は、朱音さまという方です。翼さまとは元、恋人同士で……」

カエデはいつの間にか両手をかたく握り締め、床に目を落として眉を顰めていた。以前自分の前に姿を現した朱音は、それはもう性格の悪そうな顔をしていた。

自分の黒い瞳が無くなってしまったのは彼女のせいと言っても過言ではない。カエデは彼女のこと恨んでいたのだ。

しかし翼の部屋で朱音の遺体の写真、そして殺害される瞬間までを映したビデオを見てしまっただけから、そんな気持ちは消え失せていた。泣きそうな顔をして、生き続けたいと翼に懇願していた朱音の顔が

脳裏に浮かび、いくら消そうとしても消えてくれない。

彼女も同じ気持ちだったのだろうか。殺される瞬間の自分と同じように、この世界に絶望して死んでいったのだろうか。

他人の気持ちは分からないが、もし彼女が自分と全く同じ気持ちを抱きながら死んでいったのだとしたら、ただ無念でならない。自分は機械なので、何とか再び命を貰って雲八と出会い、今まで知らなかった世界の美しさや素晴らしさに気づくことができた。

朱音は世界の本当の美しさを知っていたのだろうか。最後に恋をした男性というのは、一体どんな人だったのだろうか。

瞳の端に涙が滲むのを感じて、カエデは慌てて床に視線を落とした。そうでもないかと、今にも大声を上げて泣き叫んでしまいそうだったから。

「カエデ」

すぐ耳元で、優しい声がした。カエデははっとして雲八の方に目を向ける。

「帰ろうか、カエデ」

「……え」

雲八が顔を顰めながら立ち上がった。それを見た東山は慌てて片手でそれを制す。

「何してるんだ、暫く安静にしろと言っただろう。出血多量で死なれたら困ると何度も言わせるな」

「平気です、すぐ病院に向かいますから。助けて頂いて本当にありがとうございます」

軽く肩を押さえるようにして歩き出す雲八。それを横から支える力エデ。

暫くそんな2人を見つめた後、東山はやれやれと首を横に振って微笑んだ。

「……仕方が無いな。この電話番号は004号に伝えてあるから、何かあったら連絡してくれ」

「はい。失礼します」

「ありがとうございます」

2人が去った後、東山はベッドや医療器具を片付けながら小さく息を吐いた。

「まったく……」

あんな顔をするロボットは、生まれて初めて見た。きつとあの男なら004号を幸せにするだろう。

あんなに沈んでいた彼女の表情を、あそこまで輝かせることが出来たのだから。

第51話 漫画

明け方、雲八とカエデは自宅のマンションへ帰りついた。
色々なことがあったせいでへとへとだったので、結局病院へは行かなかった。

「疲れた……今日はもう、寝よ……」

雲八はもごもごとそう呟いて、玄関先へ倒れ込んだ。

風呂に入っていないので汚いままだが、次目覚めた時に入れば問題ないだろう。

「雲八さま、風邪を引いてしまいますよ」

心配するようなカエデの声。

その言葉に答える気力も、もう残っていないかった。

雲八の意識は吸い込まれるように、深い眠りへ落ちていった……。

カエデが目を覚ました時、もう時刻は昼前だった。

慌てて起き上がったと玄関へと向かったところ、そこにはまだ雲八の姿があった。

幸せそうに眠っている雲八を見て、カエデはそつと微笑みを浮かべる。

風邪を引かないようにと夜かけておいた毛布の位置も雲八の体も全く移動していないということは、相当ぐっすり眠り込んでしまっているということなのだろう。

雲八を起こすのはやめ、こんな状態の時に人が来れば恥をかいてし

まうだろうから、玄関の鍵も閉めたままにしておく。

「……雲八さま……」

その寝顔を見つめ、また泣きそうになる。

（助けに来てくださって本当にありがとうございます。私が今ここに居られるのも、全て雲八さまのおかげです）

心の中でそう呟いて、カエデは再び自室へと戻った。

あの様子なら恐らく食事を作る必要は無いだろう。

部屋の掃除でもしようかと立ち上がった時、ふと、テーブルの下に積み上げてあるものに気が付いた。

屈み込んで拾い上げてみて、はっとする。

それは、ついこの間モ力から貰った漫画だった。そういえば全く読んでいない。

カエデはその場に座って、その漫画を手にとった。

あの日のモ力の笑顔と言葉が脳裏に蘇る。

『なんかねえ、泣ける恋愛モノらしいから、読んでみなよ！』

「……れんあいもの……」

恋愛、という言葉は知っている。

男女が恋い慕うこと、また、その感情の名称だ。

好き♡恋、片想いと呼ばれるもの。恋愛とは、男性と女性が互いを想いあうことを意味する。

恋愛モノというのは恐らく、男女の恋模様を描いた作品という意味なのだろう。

誰かの恋愛事情を読んで涙を流す、という行為がまだ良く理解出来

なかったが、とりあえずカエデは漫画のページをめくった。

第52話 来客

インターホンの音が聞こえた気がした。顔を上げて、玄関の方へ顔を向けてみる。

……聞き間違いではないらしい。またインターホンが鳴った。

いつの間にか漫画に夢中になってしまっていたようで、時計の針は先程から2時間半も進んでいた。

慌てて漫画を床に伏せて立ち上がり、玄関へ向かう。

雲八はまだ同じ場所で心地よさそうに寝息を立てて眠っていた。

「ど、どなたでしょうか」

扉の外に向かってそう尋ねてみる。

すると、扉の向こうからは元気の良い女性の声が聞こえた。

「あつ、カエデちゃん？」

「！モ力さん、ですか？」

「うん、そうそう！良かったあ、留守かと思っちゃった！あのねー、友達から雲八が休んでるって聞いてね、ちょっと心配になったから食事でも作るうかと思ってお鍋の材料持って来たの。良かったら入れてくれない？」

「は、はい。少々お待ち下さい」

カエデは慌てて玄関の鍵を開けた。

すぐさま扉が開き、モ力が威勢よく飛び込んでくる。

「やつぽー雲八！元氣ー？」

はた、とモ力は動きを止めた。

たたきに倒れている雲八を見て、突然笑い声をあげる。

「え、もしかして雲八ってば二日酔い？ 大丈夫ー？」

「モ、モ力さん。あの、出来ればあまり大声を出さないようにお願いします。雲八さまは……」

カエデが言い終わるよりも先に、雲八の体が動いた。

モ力の甲高い声で目が覚めてしまったらしい。雲八はゆっくりと上半身を起こし、首を傾げた。

「……モ力？」

「あ、雲八。おはよー！ 今日大学休んだでしょ？ お鍋の材料持ってきてあげたよ。皆で食べよ！」

「え、……俺、ずっと寝てた？」

雲八と目が合い、カエデは小さく首を縦に振った。

その仕草を確認した後、雲八は再びその場に寝転んで呻き声を上げる。

「そっか……。モ力、悪いけど、俺いらない……。食欲無いし……。もうちょい寝かせて」

辛そうに顔を歪めながらそう呟く雲八を見て、カエデは眉を下げた。まだ傷が痛むらしい。病院に行かなくて本当に大丈夫なのだろうか。

「……雲八ってばやつぱ二日酔い？ 顔色悪いし。じゃあ、ゆっくり休んでなよ！ とにかく折角来たんだから食事作っただけね。カエデちゃん、一緒に食べよー」

モ力は言いながら遠慮なく室内へ入ってきた。
軽い足取りで台所へ向かい、そうそう。と思い出したように振り向いて、こう言った。

「カエデちゃん、そのままだと風邪引いちゃうから雲八を部屋に連れていってあげてくれる？ あたし、準備しとくからさ！」

「えっ……、は、はい！ 了解しました」

カエデはモ力の言うとおりに雲八の体を支え、助け起こした。
起き上がった瞬間雲八が僅かに呻いたのを聞いて、心配そうに顔を歪める。

「雲八さま……、大丈夫ですか？」

雲八はカエデのその心配そうな瞳を見て慌てて頷き、笑みを浮かべた。

「あ、うん。……平気だよ、全然。ちょっと疲れただけ。傷も今はそんなに痛まないし、もう少し寝れば体調は回復すると思うから」
「……そう、ですか」

カエデは少し安心して、ほっと息を吐いた。

「ありがとう、カエデ。1人でも部屋には行けるから、モ力が変なことしないように見張っておいて？」

雲八は冗談っぽくそう言って笑うと、カエデの手を離れて自室の扉の向こうへと消えて行った。

その後カエデは暫くの間、雲八の部屋の扉をじっと見つめていた。
雲八が自分の手から離れて部屋へ入っていった時、何となく孤独を

感じたような気がしたのだ。
雲八にもっと触れていたい、と、そう思った。

（どうしてだろう、私……）

いつの間にか、あの笑顔がすぐ近くに無いと安心出来なくなっ
てしまっている。

第53話 告白

「あつ、カエデちゃん。お鍋勝手に借りちゃったけど良かった？」

台所へ向かうと、既にモ力は料理に取り掛かっていた。

「はい、構いません」

「そっか、良かったあ。……さて、今日はちょっと頑張っちゃおうかな！」

モ力は腕まくりをして、野菜を包丁で切り始めた。

カエデはぼんやりとそんなモ力の後姿を見つめて、ふと、思った。

モ力は人間で、自分はロボットだ。

私たちは同じ様に呼吸をし、料理を作り、会話をする事が可能である。

しかし、私たちの間には計り知れない大きな差がある。それは目には見えないけれど、確実に存在する。

モ力は人間だ。雲八も人間だ。だが、自分は違う。

言ってしまうば、ただの金属の塊なのだ。心が無ければ、そこらじゅうを駆け回っている車や、毎日自分が使用している洗濯機などと同じ様なものなのだ。

（どうして私には心があるのだろうか）

車も洗濯機もテレビも電子レンジも自分と同じ“仲間”だ。彼らには心が無いが、自分にはそれが存在する。

(……ということは、私は車や洗濯機の仲間では無い?)

幾ら考えても答えは出てこない。

自分には心があるから身の回りにある機械とは違う存在だろう。けれども人間の体は鉄に覆われてなどいない。心臓も脳も全て、電子的な命令で作動してなどいない。つまり自分は人間の仲間でも無いのだ。

(私は、何と同じモノなんだろう)

自分が雲八の仲間では無いという事実。

モカと雲八のやり取りを見ていたら、突然心の中に浮かんできた疎外感。

急に、どっちつかずな自分の存在に恐怖を感じた。

「カエデちゃん、この味付けどうかな? ひよっとしたら濃い過ぎるかもー」

モカが笑顔で器に入った鍋の汁を差し出してきた。

カエデもそれを笑顔で受け取り、口に運ぼうとする。

しかし、突然モカと雲八の会話や笑顔が脳裏に浮かび上がってきて、体が石のように固まった。

がしゃん、という大きな音と共に食器が床に叩きつけられた。

食器は割れはしなかったが、中に入っていた液体は床に勢い良く飛びはね、広がっていく。

「も、申し訳ありません」

慌ててその場に屈み込み、食器を拾い上げた。

「ごめんカエデちゃん、もしかして熱かった？」

モ力は焦ったような声をあげながら、その隣に座り込んで床に広がった液体を布巾で拭き始める。

「い、いえ……」

そう返事を返すのがやっとだった。

胸が苦しい。思うように息が出来ない。

「……カエデちゃん？ どうしたの？ なんか顔色悪いよ」

「……へ、平気です」

「でも……」

心配そうに顔を覗き込んでくるモ力。

カエデはゆっくりと顔をあげ、モ力の瞳を見つめた。

そして、一瞬躊躇った後、口を開いた。

「モ力さんはまだ、雲八さまに好意を寄せているのですか？」

「え？」

「……まだ、彼の事を想っているのですか？」

消え入りそうな声でそう呟いた後、カエデははっとして首を横に振った。

「あつ……ごめんなさい！ 違います、わ、忘れてください！」

モ力は首を傾げたが、すぐに笑ってそれを否定した。

「あはは！ まっさかあ。今は好きじゃないよ。今はね、遠距離恋愛中の彼氏がいるの。だから雲八のことは何とも思っていない」

その言葉を聞いた瞬間、カエデの心の中に押し寄せる安堵感と、くすぐったいような不思議な気持ちが湧き上がってきた。

その気持ちを押さえ込もうと躍起になりながら、カエデはモ力にすがりつく。

「モ力さん……、私は故障してしまったのでしょうか？ 変なんです……。今まで感じたことの無いような気持ちが……ずっと続いている……。胸が痛くて、苦しくて……。まるで、……。そう……。」

誰かに、恋をしているかのように。

「モ力さんに頂いた本の女の子が言っていた症状と酷似しています。どうして……。こんなに苦しいのか、辛いのか……。わからない……。どうしてでしょうか……。？」

「あ、……。ええ？ ご、ごめん、ちょっと良く意味が理解できないんだけど……。もしかして、カエデちゃん、誰かに恋してるの？」

モ力の瞳がきらきらと輝く。この年代の女性というのは大抵、そういった話に敏感だ。

しかしカエデの瞳は対照的に、どんどん暗くなっていく。その瞳から一筋の涙が零れた。

「恋……。？ これが、恋なのですか……。？ そんな……。私……。一体どうしたら……。！」

「何？ 何？ 泣くほど好きな人なの？ もし良かったら教えて！ 話聞くから！」

カエデは首を横に振ったが、モ力は全く諦めようとしない。

「あたしの知ってる人？」

「……………」

カエデが小さく頷くのを見て、モ力はきゅーっと嬉しそうな悲鳴をあげる。

「それってさ、もしかして……って、もしかしなくても！」

モ力はカエデの耳元に唇を寄せ、小さな声で囁いた。

「雲八だよね？」

その瞬間、血液の温度が急上昇したような気がした。

「……………」

「合ってる？ 合ってるよね？」

「……は、……い」

「あーっ！ やっぱり？ やっぱり？ 確かに雲八って結構イケメンだし性格超いいもんねー！」

モ力は嬉しそうにカエデの手を握り、微笑んだ。

「頑張つて！ あたし応援するよ！」

「……ありがとうございます……でも、やっぱり駄目です……。雲八さまにそんな感情を抱いては……」

「どうして？ 確かに結構年離れてるけど、全然余裕だと思うよ！ 世間には10歳以上年の離れてるカップルだっているんだし！」

「いえ……そうではなくて……」

「え？ あ、もしかして親戚間だから駄目ってこと？ もう！ そんな常識に囚われてちゃ……」

「違うんです」

カエデの目のふちに溜まった涙が少しずつ床に落ちていく。それを目で追いながら、カエデは嗚咽を洩らした。

そして カエデは、脳内に浮かんだ言葉を、そのまま口に出してしまったのだ。

「私は……ロボットだから……」

その瞬間、モカが両目を見開いた。

カエデははつとしてモカの方を見る。しかし、もう遅い。

「え？ ちょ、ちょっと、待って……。どういう、こと？」

「……あ……」

「ロボットって……カエデちゃん、が？」

「……っ」

カエデは固く目を瞑り、意を決して、頷いた。

「は、はい……。私は、雲八さまに雇われた……女性型アンドロイドのメイドロボ、製造番号004号です」

その瞬間、モカはカエデの手を離した。

信じられないものを見ているような顔をして、ゆっくりと後ろへ後ずさる。

「嘘、……確かに最近、ロボット買うの流行ってるらしいけど……」

まさか……カエデちゃん、も……？」

「モカさ……」

「何で言ってくれなかったの？ ……あたし……カエデちゃんのこ
と好きなのに……。」

ほんとに、……妹みたいな……そんな気がしてたのに……。それな
のに……！」

モカの瞳に涙が浮かぶのを見て、カエデは思わずモカの名前を叫び
そうになった。

しかしそれよりも一瞬早く、モカが素早く立ち上がり、持って来て
いたバッグを掴んで玄関へ走り出した。

「モカさん……っ」

「来ないで！」

泣きながら玄関から飛び出していくモカ。

カエデは裸足でその後を追い、モカの腕を掴んだ。

「ごめんなさい……騙すつもりは無かったです。ただ……」
「……離して！ 離してよ！」

モカは強く腕を振り払うと、手の甲で涙を拭い、俯いた。

「あたしさ、モカちゃんに信用されたかった。モカちゃんの抱えて
る秘密とか全部、ちゃんと教えて欲しかった……」

その言葉を最後に、モカは一度も後ろを振り返ることなく去ってい
ってしまった。

カエデの瞳からは涙が止め処なく溢れて地面に落ちていったが、ま
るで足が地面に縫い止められているかのように、もうモカを追いか

けることは出来なかった。

第54話 衝撃

それから数日後、大分傷も塞がり体調も万全になった雲八は大学へ向かっていた。

歩いていると、ふと前方にモ力の後姿を見つけ、早足でモ力に近づいていく。

「モ力」

声をかけると、モ力は弾かれたように後ろを振り返った。

そして、一瞬だけ 泣きそうな、辛そうな顔をして唇を噛み締め、すぐに前を向いてしまった。

「あのさ、こないだカエデから聞いたんだけど、」

「ごめん。悪いけどあたし田中教授に呼ばれてるんだ。急いでるからその話はまた今度ね」

「嘘つくなよ」

「失礼ね、ほんとに呼ばれてるの！ とにかくその話はまた今度にして！」

「……ちょっと、待てって！」

モ力の腕を無理矢理掴みこちらを向かせると、モ力は眉間にしわを寄せて雲八を睨みつけた。

「お前、嘔吐く時絶対唇舐めるからすぐ分かるよ」

「……うるさいっ」

「頼むから話聞いて。こないだカエデから聞いたんだけどさ、知ってたんだって？ カエデが……その、アンドロイドだって……」

「知ったけど？　それが何よ。あんたもカエデちゃんも、あたしを信用できないから黙ってたんでしょ？　親戚の子だなんて嘘ついちゃってさ……。あたしがどれだけショック受けたか、あんたにわかる？」

モカの瞳に涙が浮かんでいくのを見て、雲八はモカの両肩を掴み、ゆっくりとこう言った。

「聞いてくれ。カエデは人間恐怖症でさ、最初は人間を見るだけで発狂するくらいだったんだ。だからあの頃は、モカにカエデがアンドロイドだってことを伏せておくしかなかった」

それを聞いたモカは、今日初めて雲八としっかり目を合わせた。

「人間恐怖症……？　なにそれ、どういうこと？」

「カエデが、もうモカには隠し事をしたくないって言うから……全部話すよ」

「……？」

カエデと出会った日、酷くカエデに拒絶された事。少しずつ心を開いてくれたカエデと共に買い物へ行った時の事。

モカと出会うまでカエデは雲八以外の人間をまだ信じられずにいた事。

以前の雇い主である翼に受けた暴力の数々、カエデが心に負った深い傷、再び翼に監禁されまた殺されかけた事……。

長い長い時間をかけて、雲八はカエデと出会ってからこれまでにあった事の全てをモカに話した。

モカは、ただ黙って雲八の話を聞いていた。その瞳に大粒の涙を浮かべながら……。

「……雲八」

「ん？」

「あたし……カエデちゃんに酷い事言つたの。カエデちゃん、辛い事沢山あったんだよね。それなのにあたしろくに話も聞かずに、自分の感情を全部カエデちゃんに押し付けちゃった……」

モ力は溢れてくる涙を拭いながら、声を絞り出した。

「どうしよう……あんな事言っておいて、今更……謝つたくらいじゃ駄目だよ。許してもらえないよね。ねえ、雲八、……あたしどうしたらいいのかな……」

「……」

雲八はモ力の頭を撫でてから、言った。

「今日にでも、カエデに会いに行つてあげてくれないか」

「……！で、でも……あたしなんか会いに行く資格無いよ……」

「カエデはモ力が必要としてるんだ。カエデにとって、モ力は大切な友達なんだから」

「！」

モ力はその言葉を聞いた瞬間、雲八にしがみついて泣いた。モ力の背中を撫でてやりながら、静かな声でこう尋ねる。

「会いに行つてあげてくれるか？」

モ力は何も答えなかったが、雲八の腕にしがみついたまま、何度も何度も深く頷いた。

第55話 友達

その夕方、カエデは雲八の声を聞いて玄関へ向かった。

「雲八さま、おかえりなさい」

「ただいま、カエデ」

雲八が玄関内に入る。それと同時に、雲八の後ろからモカが顔を出した。

モカの顔を見た瞬間、カエデは驚きで両目を見開いて口元に手を当て、気まずそうに地面とカエデの顔を交互に見た。

「モカさん……あの……私……」

すると、モカはカエデに抱きついて涙混じりの声で言葉を紡いだ。

「……カエデちゃん……ごめんね、話は全部雲八から聞いたよ。あたし馬鹿だね、カエデちゃんの気持ち、全然考えて無かった」
「……………」

涙を堪え切れず、カエデは必死でそれを拭いながら笑った。

「そんな……謝るのは私です。モカさんは大切なお友達なのに、隠し事をする方がどうかしていました。本当にごめんなさい、モカさん。今度から、絶対に隠し事なんてしません！」

「……カエデちゃん……！」

泣き笑いながら抱き合う2人を見て、雲八もつられて笑顔になる。
2人の頭を撫でた後、部屋を指差した。

「こんなところで話すのもあれだし、中でゆっくり話しなよ。俺、部屋にいるからさ」

「あ、ありがとう雲八。それじゃあカエデちゃん、行こ行こ！」

モカはもういつもの調子に戻っていた。若干赤い瞳をぱちぱちさせながら、遠慮なく室内へ上がりこんで行く。

「良かったね、カエデ」

その後姿を見つめながらカエデに向かって笑みを浮かべると、カエデは小さく微笑んで頷いた。

「はい」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7091e/>

メイドロボ

2010年10月11日13時38分発行